

空苗日記録

賞むる時  
秋風あきかぜし  
蝶ちょうの苗なえ。

本問文庫  
文庫 14  
A147  
2





文庫14  
A147  
2



四月拾壹日 日本曜日 晴天

朝は六時前起き出づ。海の面の目景色中々好志。此れを  
捨て歸るのと思へば。頗る情なく感おちり。朝食後  
宿へ二田の茶代を与ふる。志田を取りて。跡は返る。来る  
角三論せども肯せず。首頭此れを措きて。余等も位に来る。  
止むなく。鉄道馬車會社を。却還を諾者。別子来る。跡は  
七竹を去る。七時十分頃。馬車は去り出り。函山嶺の山目景。松  
樹の間より。さうと見れば。何心する。と。せや屋の竹。方。信。傳。り  
る。ま。と。酒。白。志。く。と。後。馬。車。は。い。の。酒。白。の。橋。来  
る。

王くまげ。函根の山。雪ありぬ。

早川のて女。寒く。あるらし。

行く春や雪まだらなり。函根山。





函嶽元とある春の雪とさうらう

河畔の若草緑やうやく濃く水は悠々と来て行春の思  
を宿り皮白き汀の彼方は澳舟むらさきと大島の歌  
淡くも烟霞のうすみ糶糊たり。

波浩蕩大山鳥のすみ行く春や。

酒匂川の水も春あやしくけふの晴。

水流れ若草芽はふ春の暮。

麓踏や長柳咲せり春の河。

酒匂の町を行抜けて松原のゆるる頃ふと見れば富士

雪の包まれて皚々と志願をぬくげめは空よく

晴れたれば雲もさし。

雪の爰年枝一文字画設このふ。

山嶽いづく富士ヶ峯白志春の暮。

松林の間松梢さまく富士嶺の形を蓋ふて一瞬  
毎光會系の変わゆく面白き。

春の松の梢も富士の雪も近き。

さまく富士の胎も春の松。

茅屋あり青松二本根を共して高く立ち富士

の雪は間も白く来て画日景に奥に此所あり。

雪の富士一画を欠まうの春の暮。

行く春や富士まだ白き松木も

春の富士のうすくくるの屋とまろくく。

富士は白く麓踏青々たり春の暮。

馬は急ぎし走れば度々止めて先方の車を追及す

るを辟く鬼角来て停車場も春せしは午の前

七時三分位あり。



発車の時間には今者は志向しあればと秋首  
 と共の磯より下りたる海山の日暮の霞あふる面白き  
 大磯江ノ野は東より近く小田原よりくは鳥籠へつど  
 ける磯山蛇籠と名を長くついでけり。竹敷あり  
 風をよそしつゝ茅葺の屋根をみるゝを立す。  
 漁夫ひとり網をくらすや春の磯  
 春深志田府津の村の松のそよ  
 竹敷敷の暮る春の磯の風志けり  
 停車場の内より戻りて待てるさとの時をりて汽車来  
 る。秋の月と暮る汽笛車の隣れる車室の身を揺す  
 録車烟を穿けつど過ぎりく圃間の春いと深  
 え春の畝に桃李は青く一は白き茅葺の  
 り松間と立つ立す。目暮の暮るさうしと口も又

以て春の旅の一題とする也とす。

暮る春の磯の風志けり  
 西の庵の松青くた側在隣春風と笑ふと見  
 る向の車は大磯の磯に立す。

松の向の磯の暮る春の首春  
 春の風を花にれきりぬ丹信の室  
 車走せ出れば小細の波は白く空のするぞ  
 見ゆる。

行く春や大磯の海波はくま。  
 高麗の緑移く色濃く花水の流はと去る松  
 林の向に入る。

行く春やサ化れ川に櫻散る  
 春日風や高麗山笑ひ化は松林



平塚よりはお林の道を行く大山の姿さきま  
みせぬしと人ど車空心を離れざるの感あり  
行春の山大正のまはたはちか  
馬入の川は流るやのよあはれ行く砂地の波  
才は一カ頃の波いと長閑な霞みたり  
馬入川の流れの末の清のすむ  
山高く長江悠たりに行く春也  
小松の岡々散りある茅屋増草土丘と春  
の眺面白る藤澤大船も過ぎし平塚のまは  
はまばあ西行の車を待たせし重の柳枝  
もたはさるはこのまはたりに

春青く山間の櫻を春深あま  
行く春の平塚の所は櫻咲く

下らぬのを思ふ内汽車は本の程々  
神楽の丘は彼方の見ゆ車高手二三我を前子  
たを相滞る。目く先まき志漢はすし  
一人静座室の中に入らまゆめたり前快なり  
やとて塔然たり。秋骨と相融みて大笑志  
也。横濱もも新時のぼる者す。巨船林檎畑  
の春風ふあひくすをこれの一の眺あり。  
横濱の里船の春の道日  
神楽の海もあやう鶴見の松原の風積りあるも  
彼方の海面は白帆多くなりもある。  
春の目か鶴見の沖に白帆のさく  
行く春の磯松がく白帆のさく  
川崎の利木園には花をゆけあまより六脚の流



子春保しや。

梨の花白く流のまの春ありし。

六御中 梨の花さく川にたい。

六御は 梨の花散る流のふ。

大木林は近く 桜の花多く咲きて 家屋を色づ  
るぞ見もある。

大木林や 桜の花のふの家づゝ

品川の路 停りの桜また春を惜しむ。

ハツ山や 路のさく散る惜しむ

砲台のこのふの春の山にづく

長閑さる白帆ねむれ袖ヶ浦

車は家屋やうやく志げき間をたごんで  
きまのよの時信まる けは新橋あり下

車あて 駟車を駆りて 葉花の向ふ

サドルふらのこれ車を思ふ春のふれ

とある屋敷の桜はうつくし風よ吹かすまた

都路のさくはけりけりよの也情けり

昔る屋敷も 都のさく風よ吹かす

我を待りの 都の櫻散る聲は

洋人の許るればは 彼は笑ふ我をゆかぬて

は遊面を拜するさと思ひ 此は又何た

る仕合ぞ

花のうららかに 留守を告ぬ 親前のみ

於三時頃 街にまき生む 牡丹のまきり 舞を

見ふ

簪は誰のみか げて 夫のるる



若國草々屋を以馬の者も、二松を以て、鎮道馬  
車を以て、万世極まり来る、お年の水の堤  
を西行す。

神田のよ花散りけり春の暮  
散る花を碎りて登りけり高瀬の舟  
船頭の髪は花たまりけり高瀬の河

三葉文史の河の柳緑深者

のこれゑの河の柳の春もあはしく

柳は緑春着れんをりりれの舟

心を叩けは女將軍をせ出て旅を我出さすは嬌  
笑者相あみさすぞくまの此方へとも我を海  
く

女主と春を惜みけり今りの暮春

いづれも都のはこののそとのは

獨り心先軒日印と志は此旅の身ありあを誦す

女連大に笑ふる耳を傾く日記を見せよとては

れなれど我は博の計りよのばとて辞す

糸巻と琴の糸天のお札を早草の研草を子

を御倉せらる田舎をば菓うのりければ非常

たお柳馳走するのとお頂く時あるありけ

む辞者を柳村をを訪ふ相共の家へ歸る

秋月次のを来り放談の時を暮すすいと凡そ

二時向我ひとり得言のりて外村子は涙

然とて我云ふけりを聞く秋を待たまひし

悦然たり柳村をよみ并天のお守をを尋す

此れはまの家の女神の守り札



情見の箭を防ぐ措きあるらむ。

行く春や弁天の守まを友の賜くる。

二子きりて 疲れて寝ぬ此夜よりは北の風敷  
へ入るまあり。

いざさらば花野の草の足あきせむ

さまじくの花人たりけり春の旅

「お色の日記作らばや」と云ひし人のはなぶ可く

もあきず。

拾二日金曜。三晴れたり

朝は筑紫抱へりきぬ 野へい金日牡丹うもて 簪を買

ひ草人向ひ 山登勢等の宮を叩く 熊等

外出せんとも 用き申すりし 疑をもふふ 此

月中 野へいしといふ 野へい は日録の

補はるはは志 梅乃 秋月 藤村相携さへて  
来る。

おほる夜よ昔の意を流らばむ

来る拾四りち は 少金井近侍と定めて 諸政

梅を飛はす 雨子去りて ぬい何もす

眠子就きぬ。

拾三日土曜日

朝は遠く起き出の 午後は 秋月の宿を訪ふ

酒竹あり 晩方相携さへて 上田氏を訪ふ

在りし 去る赤白の 命き 放去す 秋月

を我必の 伴ふ 柳 花子 来る 明日の 探花

行を 話を ありて 去る。

共取る花の 藍のもし見ある 今夜のよ。



明日はしつしつ梅のりせむおぼる月

拾四日々曜日空曇書以雨午後晴

此日は全行七人小玉井の梅守より三井は

細竹の不言の宿屋の下女は梅中とあり

方二のれたる事とある人し。今井の梅守

梅を治る者たる形ばりの梅守り。車を二人

来て浮す音あり。句の成りそうたと思ひて佳む

す細竹早くも後あり。あれは句の成りそうた

いふるぞ。我より子確ありて。梅

二人ありて車は治る者けり。此本梅

と云へば一行咲然とて笑ふ。数甚る夢

を食ふ。主可席へもけり。ぬい。梅は。梅

の梅は。玉三。真打

の沈痛なる演曲の眼を覚ます。梅の書

は。梅の時あり。梅の書

拾五日月曜日天気入り

朝は筑地へ行く。天知庵を叩く

家へ歸れば住持等の暇乞ひ来り。由あり

一。まの女中へ向けす。梅を封じて。一書を

す。一夜は秋骨を討め。大に誇り

拾六日大曜日雨降る

朝は築地へ行く。書頭。酒竹来り。軍歌一曲を

高砂の島 膨湖島 遠き海路の島を

車我軍洋の船は編まる 我日の本の松尾の



吹き麻糸けいと兵士は

劔を仗りて夏をたへ

頃はず生の春のさす  
おぼろろのぼる島影や  
近きには向も裏正角

大海のなは目もはるる  
遠く磯山いとまのり  
國の馬みは砲台の

鳴るは雷雲のさす  
我軍艦の舷側を  
いそ時来たぬとまきもは

雷光あけく雨めき  
至るちりまは湧き出ぬ  
いそいで陸に上りけり

日よるる國の云夫の  
馬公の城や月頂の  
まのぬ穂威大君の

又の前は敵もさく  
塞はむらりの陥りて  
野拂子清く其の風

拾七月水明佳日晴

朝は葉地 歸津山登勢等を討ち明日歸

國の余は上ると云へり。家多きは柳村酒牛

福島の三氏来る。我誠騎五月於三日を以て始

まる陣あり。四時前柳酒二子より急をて島始

の首を叩く。閑談九時の頃よりして静し。歸

全秋有月を訪ふ

拾日本推日晴

朝は葉地 午後には三葉を討ちを放談

道りよりさす。三葉を討ち。夜は別子あり。事

ふこそ難き。ぬ

拾九月金曜日晴

朝は葉地 起き出ぬ。拾時地 三葉を討ち

朝は葉地 起き出ぬ。拾時地 三葉を討ち



小我曲りの人様送感なる宿願をくり返す  
す内雨降ぬ北才の天電光いと志げ志。  
雷光や北の雲もかる春ののり

家まては別まますさしよさくして首肯しぬ。

北日土曜の晴

此日は朝秋首を訪へば柳村子ありし。午後  
歸れば天来あり大子談を諸子ありて惜  
少金井紀の穉を記す。

北日々晴の晴

朝は老翁人けき晩餐式に列す。秋首の序  
を記す。島崎村まう志の我不在  
の由を問うと去れりといふも。雨公出で

平川の海を言ふ。柳村藤村共々宿あり

大子談は夜は少金井紀の穉を記す

北日月曜日晴

朝は築地へ行きては屋敷に記き出り。少金井

紀行を多し。午後三時頃。金井路を出る

て。酒竹を訪ふ。不在ありければ引さる

す。五時頃。夕日。柳村西氏あり。少金井

の住みある。七時。別家をでて酒竹を訪は

むと根は。血深橋のまて。な子あり

き。春を相携り。平所へ行く。紀行は

春を弄するの。記し。編譯子の宿

る。政とす。下らぬ。胸中

頗ぶ。平あす。懐然と。歸途



く石も也時暮中美人立てり。ひびき

一羽鳥を嘆き去りし。

廿三日火曜日雨降る

朝は築地へ行きぬ午後は家あるは別な事

事もなくして只日記の補綴をさせり。雨は

と薫やこの時降りし。

行く雨の雨のれりや梨のそと

酒竹子まき。二三の句を録してある。白く

春雨や草鞋たまさか。雨の

雲雀二羽大河端を。雨の

君の生涯の香匂を。とて人の形あるは、

夏川助は。短夜のたねの子。

といふるよりしをも。はれり。

在はなも。しのまき。の。淋。孤燈の。

る。ま。の。車。を。思。へ。い。い。い。

行く春や雨の音。とて。夜は更けぬ

更くる。夜。鐘。の。ま。の。の。雨。

廿四日水曜日晴

朝は築地へ行く。家あるは日記を書きし。夜は

別の何事をもさせし。

廿五日木曜日夜雨

朝は築地へ行く。上野氏。雨の故を以て。浦

井仰せ付けし。る。二時。より

二時。より。二時。より。二時。より。

雨。降。り。し。子。は

無。事。遠。慮。を。早。れ。給。ひ。け。む。

道中首目の老葉  
が達して涙を流す  
あり。先んじて御食下り  
朝は築地へ行く。東あまのり。下野氏。下野氏。下野氏。



廿六日金曜日晴

朝は筑地へ行く上野氏来た来りする由り  
み通舟を仰せ付けらる。家には手紙あり相  
傳さへて外志心金は一筆よ子お許を叩き  
昨夜の金筆并下駄を返へす。お名まありけ  
れは去りて柳林の宿を叩き。晩をまて雑  
談す。夜は秋月のお宿を訪あり。赤日あり  
考よある地味を扱あす。

廿七日土曜日晴

朝は九時頃隣家の射たかまを成す午後  
秋月を討てて時待計。夜入りては秋月  
赤日来る。赤日凡俗文選と鶴衣を借  
す。秋月を捕へて少先一ハウラドの付を  
る。

三島と若狭海院  
近侍を扱あす  
一合屋お七の墓  
を見たり。

廿八日々曜日晴

朝は秋月入りて秋月才おさ定りる。家  
は東さまのしを讀み読みぬ。夜七時  
秋月を討あり。子の弟あり。春を弄する  
をよけ取り。秋月の下を安れて一筆あり  
を叩き。十時。まで語る。子おと具一面目ある  
可成る宿の解釋を弄る。

廿九日月曜日晴

朝は筑地へ行く。類はれ痛がりければ医師  
の診。家下を玉又く。午後は午睡をす。いと  
心地すぐれす。知重子おは。来れり。  
夜は去る。於一日以降の月録をものす。



命は蛇の生れ更りあるべし。執念深く志に疑  
情の心ほし。

三拾日火曜日日雨

朝は築地へ行く。歸途に医師の許を付る。骨辺の  
結節を診察する。あて世見ふ。さるるは椎の定員を食ふ  
日録を讀む。まのく。面白き隣家の庫の面より  
三重櫻の爛熳と咲き出でたるを見ある。

春は行き名残の心こゝ瀟灑櫻

前庭の梨花は何時の間かの散りし青葉の風子  
そよぶ。

雨幾日梨の樹青くありあり。

夜よぐまは氷を取り来らるる頬の膨れたる詩を  
冷やす寝ねはは拾一時頃

五月一日水曜日半晴

此は朝築地へ行く例の如き歸途に医師の許を付  
ふ。家をば二時頃よりして水を頬部を冷やす。午時  
池頃夕影に來る。藤村も次いで來る。七時過る。子來  
り。秋月來る。三時頃よりして時談話す。二子來り。子  
來り。行かぬ金を取る車を動かす。積りて付じ。子  
來り。第四編を讀む。歸る。月は西側の篠雲の  
際より白く。林葉の風を吹かせる。茶屋の燈打ぐ  
ける。池畔の眺中々佳あり。

夏早し茶屋の燈池よりうつる。

柳若葉并天竺の月の夜

人まれあり不忍池の百五の月

月おほる并天竺の黠とあり



徐赤して歸れば對席の茶屋の元をくぐる音いとまがりののの音也。

誰がらびをくるるを夏の月

家もは文藝俱樂部の内、夜行巡査を讀む脚色頗ぶる凄絶

誰の心風を散らす秋の葉

二日木曜日 日雲暮晴

昨日朝は雲地、多きは野崎の世を去りたれぬ城雄子は、國を辞して専ら博女報物を力を入らるる由ありとの文藝俱樂部を讀む。美女のお代は只さらりとあてお目出なしく、其他もまの平凡の作のみ。如く見よ又けられぬ。行春の雨小は花の比自散りぬ。

此朝春の花皆ふありみけり。

別をすするもふくして夕暮を笑くる。小倉氏来る相携りさるる。舟出き、本御通光、赤田氏小倉近々同定會を首、灌山、用きたる。この評あり、柳村子をけふ、佛蘭西風の禪、待馬を見る。大時、辞あて出ぬ。月夜、雲の向の腕あり。

初夏、月おぼろりあり、青葉山

三日金曜日、薄曇、疾風、砂塵を捲く

朝は早地へ行く、歸途、文部省の立寄る小車、の身體検査證を出さば、師範校の才も其の試験をさす、り志とのさとなれば、お出さる。引歸る、師の許へ行き、検査を証を書きてせよ。世に、鑑を



開き古文書たちと取り出たきー三時過出て一筆筆子  
を討ふ不をあり太陽第四號を受け取りも歸途  
に就く家の前を柳屋三子。来る大に読ぶ  
柳村子の昔の友の家の三則を月夜に通りし  
何となくまみ入に大い思ひしとあり去由の感話  
あり。柴舟を取り出さる。藤村口を滑らるる一  
大に賑へり。八時出て池畔をまきー月賦の  
て茶店の軒の燈をきつる。池子うらるる  
柳はいと面白くあれー。

おぼろ月や弁天堂の森黒くし  
秋骨の寓をけり子まきー三輪の向へりとも  
あゝと柳子と袂を別れ。藤村と上野を  
抜ける。香道谷追悼會のりやを誂す。宿

られぬ。月下の飛びのふ鳥の声いと哀あり。

ねぐらよまぶる鳥の声はあもる月の  
新垣下と秋骨の行進不見眺の台より  
が時夜行す。脇を流る月より。吉原の燈は  
と多くきこゆり。金龍山の木は。里く。夜  
開いと一りあるんや。南の才子一二よの燈の  
早この如く陰見す。面白き。

夏の夜や揚屋の燈列びけり  
柱は古里にあり夏の月  
吉原の燈列んで月おほろり  
月まだおほろり。て雲を閉り  
月おほろり。方の樓の燈とナシ  
九時過 歸途外、就眠せしはた時の頃







を眺む。春畝青々とあはれ連く遠林の一簇地平線に  
接するところ。筑波の峯麓をくぐり煙霞をまよあはせる。

夢畝や筑波若草をくぐり島子似たり

茶毘のけりり 初夏の野原をくぐり

茶毘毘場の煙突百舌をくぐり爽多はたけり

百草草や焼場のあらふ遊女町

道灌山のすまふ向ふ 経路緑濃くして 若柳の宿をたけを

るそ面白き。盛装の紳士のも逢へ、まの美人のるそ

しゆ。

初らや 徳子 美女の神をみるし

歸途に就く 花見寺の 躑躅花はいと艶花にして

見事あり 初ら 舟を おかゆり 野徑を 出で

野花を 摘む。

野の女 根洗子 野川 一のふ

摘み草する 少女おねる 野道

初らや 野子 舟の 田を みるし

蛙を 庫ひて 根洗子 摘み 野川

畦路 茂なる 野子 踏み 返す みるし 野川 一のふ

春に ぎ 團子 舟へ 登る 野川 一のふ

春たり。 潮花園 一のふ 踏み 野花 踏む 藤波

池を 越へ といと 長く たねたり 野川 一のふ

あき 長く 野の 野川 一のふ

藤浪の 野の 水も ぼる

池水 ふうらふ 花の 野川 一のふ

藤浪の 野の 水も ぼる

牡丹あり 野の 野川 一のふ



傾城の全盛の入り方なり。日中貴き事なり。

おどろき急ぐ根津神社の境内を抜け、午生多間を  
過ぎ、平本に寓を討ち、不在なりければ、柳子と  
袂を別ち、歸家す。六時過ぎ、平本太陽を拝する。  
一筆女史の行状を讀む。丹波の筆、欽美の地へさ  
る者あり。

行雲子物語のや、春の暮也。

未考、おどろきの平明をさす。カピヤムイリシーをさす。讀む  
文行流暢あり。

六日月曜日薄曇

朝は築地へ行く。春陽堂及び博文館へ三書へ刊  
書をせよといふ歸り。阿片喫者の懺悔を讀みぬ。  
■ 読談俱樂部を讀みぬ

七日大晴

朝は築地へ行く。家をは、ゴダムイリシーを讀む。  
午位、平本に寓を討ち、上田氏よりぬ大子、時  
過相撲さへも、三男子を討ちぬ。女史、先賢の次女を  
相傳のや、奔放の作を弄す。

初書、女史のあしひ駢也。

おどろきの、用馳走のあり、於時、坊まで、放談高  
志歸余、就けば、月下の、櫻の、琴を、彈する  
の、あり。

百も、この、他、方、の、理、令、の、因、へ、けり。

八日水曜日晴

此日は築地へ行く。おどろきの、如き、家、を、は、に、ユーマン、  
インターコースを讀みぬ。



九月本曜日晴

朝は築港へはらきぬは専務子に元六ノイ  
コエを讀む

拾日金曜日晴

此日朝於時河川上戸止人訪来る。元末を呼ぶ五時  
頃迄詰る。明日頭民の許はく可の報を得たり夜  
元本向来り志のば相共上田民を訪る不仕あり志  
のなきこと業子を訪ふ放談教訓月丘の毒  
業の間この人も字は博く是る也。此雲の影さま  
お風みしる。

月。圃ヲ若葉乱る。今月一の也

月を踏んで家子歸れば松葉時の鐘三ノ湯る。

拾日土曜日晴

此日は朝于頭民を訪ふ。大分不負あれば行く積  
志は免状の有無を問ふ事ありやを問ひ合  
べしと云はれぬ。余は元越民の方を問ふ合せたる  
上るに河邊までとあり可き由を問ひて。歸途火原  
の湯を訪ふ事。昨日午前血せし由を平臥  
志居れり。若君とわたりし。の湯をあたて  
午後一時過。合を必を辞志。牛込にある本松氏の寓  
を訪ふ事不仕あり志のば急ぎを歸せし  
可なり。上田柳村子来られ志由あり。三年三  
海の築港を待り来れり。

拾二日日曜日晴

朝衣斐氏を訪ふ。和歌山の方を聞き合せて







記多されたり。嬉々也。我は正に廿六の生ね者中  
の人あり。急を歸家せしは午後二時前ありけり  
三時頃来ん本を言ひ少時談話す。四時頃柳村を  
在りた大に放談して歸り至る。家子歸れば  
衣掛又氏よりの端書来れり。日く「現物山ありは中  
幸教師とては経験子之しき判り来れり」とも、  
以て彼等のペダント的あるを見る可也。晩まの  
イデオ字書とを通讀す。

拾五日水曜日晴  
朝は築地へ行きぬ。途上春陽が堂を寫眞面報  
を世見ふ。歸途は信九銀りの三三三の豊川の車馬  
も亦も未だ未だ勤あり。由ありければ丸の内を往す  
を歸り。神田橋の土壁上赤帽白衣の兵士

青首の内の三々占座せり。

夏村や白衣の兵士あつて  
深くは支那人の膚の疑を解かしたる宜目臭  
あり。湯島をば盲人の手を引ける小童の紙を  
推を見る。

老の身のゆるり日一げは

夏や来者。  
子を杖の盲人の背の  
破籠の背中にをるあやまのふ。

午後二時頃迄平舟の駕にて遊ぶ

雨幾日。藤棚青くもあつたり  
ほり。野薔薇散は流る  
池畔丘子の砂まみれて馬を引く車を推す



揮筆をす

三軍の人馬ふるる夏野の  
極楽の馬蹄の音の物  
弁天祠の日記を面白し

草本まき弁天堂の亦きさ  
家子歸りしは中倉をみよる手紙を著く

病小癒志を思入夏夕の夕

四時退るのちりけむ一筆女史を訪じ雑言  
少き感を御覧せられ文彦を談志那舞教の  
欠点御懐慨志大に現今の教育を難す  
辞志を歸り志は於時の頃ありあふむ

拾六日本曜日晴

けふも亦花の噂を著るけり

朝日三つは海ひて大分の日は一先  
み津す。築地へ行くと例の如き十時頃丸の  
を橋けり日本中を校りけり干頭氏子年時未  
とを求むる子不在の志は板浦氏子年時  
事情を陳じ置きたり

丙子の月や石垣方面の水青志

干頭氏の宅をゆくは不在あり志は文庫の  
雑誌社に定入り。書物を借り厚稿紙を  
ひと紙取る二時頃より国政の志は  
家事書を讀み始む。未だ未だ来れりせりイナゴを  
食す

いちぶをいひて籠を食うけはるの朝  
家人よ庭のいさぶをまゐらせむ



夜み入るも猶讀書目をたきし。時鳥のまがら  
を遊を東の才へ急ぎりけり。

宵雨や時鳥のまがらをたきし。

時鳥のまがらをたきし。月白し

雨の夜やふれも鳴きわたる。時鳥

大空や雲がらけり。時鳥

一エカ。雨のまがらをたきし。

昨夜一葉やまの鳥のこ思ひけり。上

句は思ひけり。深山の花はまがら。行

いまのまがら。下の句は

頼みさる。自らまがらをたきし。

於七日金曜の雨

朝は筆地へけり。朝のまがら。ブルグロコデユア

讀む。智恵子。三時。雨。池。味。雨。

目。雨。池。味。雨。池。味。雨。

池。味。雨。池。味。雨。池。味。雨。

池。味。雨。池。味。雨。池。味。雨。

不忍池や。蓮の。花。雨。池。味。雨。

柳青く。并天宮。赤しけり。雨。

赤木の。試験。は。雨。池。味。雨。

の。池。雨。池。味。雨。池。味。雨。

句。作。ら。む。と。赤。の。雨。池。味。雨。

けり。記。る。ま。が。ら。雨。池。味。雨。

五月。雨。池。味。雨。池。味。雨。

草。と。り。ま。甲。斐。の。雨。池。味。雨。

赤。の。雨。池。味。雨。池。味。雨。







一のうへに、おのちふべくも有らぬ身を  
 尚急げと帝時鳥鳴く。  
 忘れむと思ひ出さずはあこのしくふ  
 心は涙の海に二曲易れを百憂きた。  
 歸れとは我の言えけし時鳥  
 恋し方だるも知らぬ身はたれ。  
 此里のゆめのお出でを時鳥  
 眞実をまきし宿のヨミき世ふれば。  
 ちけんけと鳴くはあはれし時鳥  
 百憂きたる人の此のまをさす。  
 鳴はばとてあはれはせし時鳥  
 忘れぬ百憂きたるはもれぬ身あれば。

文  
 字  
 不  
 明  
 故  
 略  
 記  
 云  
 云

あはれとて雨は行く夜半沈ん  
 のちのふ ~~遠く~~ 時鳥鳴く。  
 忘れぬ身はたれ。  
 忘れぬ思ふさらるるの ~~あはれ~~ 時鳥。  
 忘れぬ思ふさらるるの ~~あはれ~~ 時鳥。  
 假の世の契をたのむ身はたれ。  
 別れの世は涙さしほるし。  
 文  
 字  
 不  
 明  
 故  
 略  
 記  
 云  
 云  
 於  
 八  
 日  
 土  
 曜  
 日  
 晴  
 夜  
 雨  
 此  
 日  
 は  
 朝  
 王  
 殿  
 を  
 討  
 ち  
 去  
 る  
 侍  
 の  
 採  
 折  
 を  
 考  
 へ  
 諸  
 國  
 神  
 社  
 の  
 境  
 内  
 を  
 括  
 け  
 神  
 保  
 向  
 へ  
 出  
 で  
 中  
 西  
 屋  
 を  
 テ  
 イ  
 ツ  
 ケ  
 ニ  
 ス  
 の  
 符  
 を  
 テ  
 ヲ  
 ト  
 コ  
 ン  
 じ  
 を  
 買  
 入  
 る  
 家  
 子



は於時頃歸る途上二三の句を安事

秋を憐む女の顔のやれぬふ。

ほそる手は物さすも古き者の暮。

於時頃元本を讀む三羽の蓮の葉の影の

あと目きしは池の歩し年天堂の讀の

幸濟れ志鴨三羽蓮の葉葉の影の在ぶ

蓮の月や蓮の葉葉の影の在ぶ

鯉子飛で蓮の葉葉は乱れけり

おぐ南やする子我の元本共の橋畔の

鯉屋のあえ念を呼ぶ書念は信阿もあ

ばとて寺すし林橋の下を山く西に

寺のたる池畔、船頭ふる面白し

不~~なる~~なる柳は青く柳葉あり

不~~なる~~なる柳は青く柳葉あり

家子と睡眼中秋宵元本より話や

柳お子来る犬の泣き午後三時過諸子

去りと豊川の射場へ了る山崎の連

中來り居れしを射るあまらるるも

腕やせし手やさるめり百女のウナ

力あやりの弦の音いしくし厚のウナ

豊川の房問子社士と肩を比べて五もく飯を食

す雨霽のぬく降の来る元本まれし

さまのぐの物仕りす藤村の消息と接

す。

夕立や桐の花散らちて青いよある

夕立や桐の花散らちて青いよある

夕立や桐の花散らちて青いよある

夕立や桐の花散らちて青いよある



并夫のお守をも  
懐かしうわらく

喜ぶ人々も人は筆も、場におる帰る者  
あつたる。元は、こびて一々よむ

拾九日々曜日朝来晴

朝日并天互び七兄の墓庄より清く此等の  
試験の決果能くもたまふ祈る。元月を  
計る於時、この教員へ行へ。中候はあま  
は存一の子で、字書を請ひむ

七日月曜日晴

七時洋服を着て、家を出て春本所より車  
を備へて又都省へ向ふ。時間頗ぶる。早のり  
ければ、帝廟は二番あり。明治学院の  
と、伊勢の國人の逢ふ。時四十五分の  
呼び出されて一室へ入れば、ウエスターの

大文字の、  
The Lamentation of Job by ...

の二頁を拾五分間を下讀み、そのこし、即  
ち大急ぎで讀む。と、二十分程待て、樓上へ呼  
び掛けらる。端方、讀讀を申し、文法上の質問、  
考へ、應じて答ふ。間違たるもあれば、当られる  
もあり。早々の市、用錢、やり、持けて、歸途、  
いは九時の、志、  
ふ、手ん木、午後は入流、後、村、村、  
既の後出て、池畔を歩し、弁天、祠、  
申の、  
る、成功を祈る。歸途、池畔を歩し、  
夜、  
無縁、  
秋、  
秋、  
秋、  
秋、



可憐な防子、難言なり。我輩の結果頗ぶ  
る元を掛りと云ふ事、之を案じ、於時靜し  
歸途に就く。

九日大晴日晴大風

築地へ行く。歸途は上野へ下車し、弁天  
橋を渡り、風甚強、志谷中へ至る。懇心  
云藤の成功を祈る事、前日の如き、書之食  
後、ボーモン集を袖に、弁天のお守を、妻  
子、弟の之、新花町をよし、お茶の、水、  
保町を、陸、振、端、は、出、心、此、  
苦痛の中、筆、文、の、舟、あり、と、知、る、  
車あり、鎌倉の河岸の才より、走せ、  
余の、心、を、あ、び、せ、て、走、り、去、る、  
此、の、心、を、あ、び、せ、て、走、り、去、る、  
此、の、心、を、あ、び、せ、て、走、り、去、る、

の車に乗る人、こゝある、我は、今、昔、三、  
位、の、金、の、ゆ、の、子、の、る、甚、  
ど、と、我、と、我、身、を、持、た、  
中、  
て、  
を、願、ふ、  
て、  
喜、ぶ、  
駭、を、  
停、  
總、  
子、  
村、  
相、



内子アリ七子誘き、午後二時退き、七軒町  
の人々を待たず、存九時迄まで、待たせて、歸家す  
家よりかはスル井ノ上の天興をみる。夕見る。

九二日水曜日晴

朝日登地へ行く、午後五時天朝子、喜美の  
谷中の首至す、拜す、スル井ノ上の天興を讀  
む、僅か九拾、梅の入り、湯子、

九三日水曜日晴

朝日登地へ行く、午後五時天朝子、喜美の  
谷中の首至す、拜す、スル井ノ上の天興を讀  
む、僅か九拾、梅の入り、湯子、  
歸す、七はスル井ノ上の天興を讀み、七時頃、  
谷中へ、道清志、浴りぬ、明の試験、出で、  
うさる、書物も、まさら、す、す、す、す、す、

秋の月をたひ、不井上の英、無、を持、ま、り、こ、が  
の、さ、み、ぬ、明、の、見、な、の、異、地、も、暮、み  
て、映、り、す、就、け、り、

七、日、金、野、の、朝、来、晴

朝日登地へ、九、日、一、寺、真、淨、法、を、着、志、并  
天、の、御、付、申、と、隱、入、れ、を、家、を出、で、大、本、の、門、前、より  
車、を、備、い、文、部、有、子、向、ふ、車、上、に、管、子、今日、の  
試、験、を、成、切、せ、む、と、い、ふ、祈、る、お、祈、り、は、今、日、の  
集、事、へ、り、今、は、九、番、あり、ぬ、志、時、を、近、き、か、り、者  
より、順、次、を、呼、び、出、こ、さ、れ、ぬ、一、人、々、付、り、大、九、回、分  
余、を、替、り、す、一、若、連、中、は、こ、こ、の、勝、三、の、杖、法、す  
松、木、と、い、ふ、土、佐、の、人、を、拘、持、す、内、村、巖、と、い、ふ、人、は、三  
年、来、十、津、川、の、ま、る、人、あり、去、年、日、取、の、先、軍、を







其他三の言葉の  
アを二上格ト発音  
を聞る。二は可  
能性をいぬ。  
今も笑じ。誠然  
可笑し。我々

みて、事止むを得たり。ホールト。上の。回行は二の言葉  
を直せしむるは、是を女の才へ三をいふや  
朝の。飛ぶ頭が去く。乱れあはば。錯後をり出す  
頗る。辛や辛や。小島神月二氏。信青。相説りて曰く  
「早言くきりうらなれば、早くやれば不都合あり」と  
余甘急ぎと行正す。小島氏曰く「スレこの回行あるべし  
と云、熟視すれども、あやゆかれば、此こそよのらひ  
と云いねば、小島氏曰く「How do you spell tomorrow  
"Basically"』と云れば、"Basically" is in the last sentence  
事あるべし。直さる。回行あるべし。と云ふれば、又  
いふ字は如何に綴るべし。と云ふ。此れもいふべし。と云  
思はれ。然れども、笑へ。之も子説きあはしむ  
答れば、子元の元へ返りて、如何のべし。と云ふ

教を可きかた。と問はる。會行。我敢て得る事あり。新  
まもあはば、此の笑は、大子若しむをいへば、小島氏  
「眞面目の。今日は、教授法の、神駈とれば、若しは、是れ其  
何等々の意見をもせざる可なり。若しは、若しは、若しは、若しは、  
と云ふべし。と云ふ。即ち、會行の目的は、是れ用事  
する可なり。與人が西洋人の前へ出て、まよはくは、是れ  
又法上の。後行は、是れ其の。若しは、若しは、若しは、若しは、  
行の不。後行は、是れ其の。若しは、若しは、若しは、若しは、  
人等も、是れ其の。若しは、若しは、若しは、若しは、  
を得る可なり。要するは、會行の目的は、是れ用事あり  
らざる可なり。と云ふ。若しは、若しは、若しは、若しは、  
見を持し居るべし。と云ふ。若しは、若しは、若しは、若しは、  
想像するべし。と云ふ。若しは、若しは、若しは、若しは、







の志 防多最中あるよしを答へけるの 新字の注出でたる  
を前との注を掃き出でて 封けりぬ 急がしたる食  
種はを訪ひ先きの程の禮を述べ 試験の結果の類  
なる佳可しし由を述べぬ 歸途は力なく 未だ  
頗ぶる困難を感じたり。おぼりのるより せめてこの  
まで 弱はる 我身はも 我らぶ 衣れり思ほへて 落涙者なり  
清所へ 端書を出たり。三時過 秋骨を訪ひ 談話申藤  
村書 元本 犬養を以て 手回し 倉庫 志を奉り 秋  
骨 歸り 来り 少 経の 傳 去り 上 田民を 訪ひ 九時 以  
去り 一 葉 女史を 訪ひ 不 坐す 志 奉り 志 奉り  
て 歸り 了 就 眠 せり。

九六日の 昨日 半 曇 夜 雨

朝九時頃 元本 訪ひ 来り ぬ。相携さへて 眉山 子 なる

訪ふ子 大 橋 新 考 記 あり。談話 申 多 くの 人 来 たり。二時 前  
晝 食 食 御 膳 せ たり。三時 過 出 たり。一 葉 子 志 奉  
ふ 故 談 新 刻 箱 根 の 注 書 見 たり 笑 ふ。鯉 飯 の 脚 馳  
去 たり。十時 前 雨 を 衝 け 歸 り ぬ。

是日 月 曜 日 朝 雨

朝 七 軒 所 へ 行 け 秋 骨 乃 び 元 本 と 方 法 なる 元 志  
り 之 後 秋 骨 の 部 屋 へ 移 け 於 時 午 過 出 たり 志 奉  
り ぬ。元 本 歸 り 来り 志 奉り 相 携 さ へ て 三 橋 立 子 向 ぬ  
鳥 又 近 傍 志 奉 元 本 と 大 衝 突 大 志 奉 事 是 倉 庫 志 奉  
物 種 を 隆 隆 せ 打 開 け 志 奉 志 奉 志 奉 志 奉 志 奉 志 奉  
一 葉 子 志 奉 志 奉 志 奉 志 奉 志 奉 志 奉 志 奉 志 奉 志 奉  
其 の 固 体 を 脱 すれば 子 洞 あり 志 奉 志 奉 志 奉 志 奉 志 奉  
料理 は 申 ぬ 美味 あり 志 奉 鎮 道 馬 車 志 奉 眼 鏡



物を下車志錦舟を經、一ツ橋を渡り、牛橋内より  
半藏河へ出、雨甚しく降り来れり。日中、中ノ橋  
へ入り、干波、杉浦兩氏子達を、誠候の結果を  
記し、行く向の周旋を平女勤す。佐々木も、是れ  
れ、おそろ、火氣氏を訪る。不在す。其の急を  
歸途に上る、雨の急を、激しく降り、来り、衣袴、其  
の濡るも、その存も志。家は、二時迄歸り、暮  
方藤村を來れり。秋骨、次を、相若、吹  
板、行く、其既、満てり。真玉の忠臣、才、津、り  
旨志。お清の、鯉谷、三、ゆり、涙を、流、り  
女、平、ある、この、ま、差、る、ま、ま、を、合、し、て、歸、る。  
廿日、火、曜、日、晴  
朝、廿、瑛、抱、へ、行、く、歸、り、水、橋、は、別、り、あ、り、あ、り、も

お、く、身、轉、じ、疲、れ、序、れ、ば、書、に、持、ち、ま、り、  
序、は、外、山、は、を、訪、る、る、ま、り、け、れ、ば、一、葉、の  
子、ま、り、は、心、ま、ま、を、津、連、の、信、實、の、侍、を、信、り、  
女、史、ち、り、我、を、慰、め、り、給、は、り、ぬ、さ、ま、り、  
の、推、活、中、に、存、も、ま、り、し、ま、り、は、歸、宅、す、り、  
廿九日、水、曜、日、晴  
朝、廿、瑛、抱、へ、行、く、書、に、寝、を、め、ら、ま、り、三、時、頃、入、浴、し、  
四、時、頃、より、壬、王、寺、へ、り、き、菓子、及び、花、を、て、見、  
る、お、松、村、の、墓、を、見、へ、り、此、の、誠、候、の、結果、  
信、の、し、し、し、し、を、告、げ、し、ま、り、本、草、の、信、を、行、  
る、福、宮、の、氏、の、墓、を、訪、る、谷、中、の、酒、井、夜、見、を、  
即、ち、子、を、生、す、り、根、を、掘、け、柳、村、を、訪、る、  
答、る、る、人、あ、り、ま、り、あ、り、ま、り、あ、り、ま、り、あ、り、ま、り、



ありけりは鳥三状おく歸り

世日本耀日晴

朝は築地へおきぬ。陛下奉迎のためとて千回

のりの国旗掲げ燈籠花をむし中々奇麗なる

人多く出れば街路中々賑へり十時次

歸途子就く書之食後甘飽を午睡を

言ひたり傍之通る界北九段を清くお録

の南鉤くも感念す。存は戯曲教習を育守

世日曜日朝は晴夜雨雷鳴

朝は築地へ行く家をは西教史の難儀

をのりおき暮方赤の氏来る氏方と平本奉

り、文曲の分、何を語り九時前去る

興不棄じて戯曲を吟ず。

青原風草の筆  
水まぬく何事ぞ。

六月一日土曜日晴

朝九時寤起。松時過り景未未きたり於一時の刻

去る二時過り柳村をけり昔も毛をけり不孝

の谷中なる酒也をけり毛あり相若子園子坂の

教若高城より一酌す。谷中の座禪堂をけり高深

柏樹の羽を見る。面白き老人白髪長く垂れて有

き英辻下顔が異相あり。一問を讀み来る

汗志と。緑陰のた。真の旅

涼。さか。川。青。川。如意宝珠

眼をきこひり見る。花のいろ

六月二日々曜日

朝九時頃寤起。川の車。車もふく。午前七時守

午存二時頃入湯。歸れば秋骨あり。旅の談志とあり



おす。暮才も几本の胃を討て、菱とろを食す。八時頃  
相共子出て一葉子の胃を叩く不在す。去々柳村  
子を討て九時過ぎまで居る。幸御通を来りて。廿町まで  
秋分と分袂す。

六月三日月曜日朝は晴夜雨

朝は築地へ行きぬ。午後眉山子討て来ぬ。酒竹も来り  
三時過ぎ家を出て、来んを待つ藤村を討て居ると三輪  
子向ふ不在。去々吉原堤を来り。山谷へ出で夜を居り  
向嶋へ至る。空腹なれば言問の隣の鳥屋まで  
一酌す。日暮るに雨降り来り。隣の家の前は静  
し。義太夫まき渡る。泉且飲み且食て且杖持す  
中々面白し。眉山子の酒且は中々強志。余は  
逐々嘔吐せり。於一時前全社を立出。墨田雨

中の夜目算中々面白志。眉山を顧みりて此日算大子用が  
可きと云ふ。枕木の傍にて眉山子羽儀を居候す。雷はよ  
く車を備ひ七軒所へ歸り。此まで眉山子は洗足す。  
去々家の毒を思へ。余、鑄字をいは於三時過ぎりて  
ありと云ふ。

六月四日火曜日日景云々

朝は築地へ行きぬ。妻を食後には午睡をす。起き  
は三時過ぎ入浴す。眉山子が昨日語し句を思出下。人は  
野は松子去々斗の乾胡蝶。感吟もさへしや。又今一句は「竹葉草  
竹の子泣くや鍋の外」といふをありき。夜小入り来り来  
る。前日の疝病の苦味を平臥を居候り。柳村を来  
る。娼妓と藝者の優劣論を付りて大子衛定を来り藤  
村と共子池畔を来り。歸宅せりは午後松崎道



川一を 足下を 偵

六月五日水曜日薄曇

朝は築港へ行く、午後二時頃一葉文庫を訪  
て雑話す。凱旋門の花を貰ふ。首肯才眉  
山子の官内を訪ふ。不在あり。急を歸る。家  
を別子へ送り、事もなく、高吟空想の時書  
去於時。追憶あり。

六月六日木曜日薄曇

朝は九時頃起き、志曲豊川の射場を弓を射  
る。追々訪ふ。弓くあり。来る。の如志於二時頃眉  
山才来る。例の如く雑書共取り出で種々放  
談をす。互に法外なる世界観を語り出で  
曲多み笑ふ所。傍人は吾人をも何と見ゆるが  
首肯才藤村訪ふ。談す。一。睡を添へ

昨日は母はお文子  
送上と行逢へり  
と云ふ

更のふらふら知れず。月は青い星を出てく中まよ  
る。光を。あまふし。鏡は中存を報じし。泉や  
うら。枕を就く。此は此年の最快なる日の一  
なり。

六月七日金曜日晴

朝は九時頃起き出で、夜の間は枕をさる。遊  
みぬ。曉は眉山子の呼ぶ。松浦のこころ。松時原  
藤村去りぬ。眉山子を引き止め。雑話す。智恵  
子まよ。七葉あけ。松浦。松時原。木まよ。事書  
をせ。志大。午後。志時。眉山子の官内を  
訪ふ。鮎を。御。バルザックの二人兄弟を昔  
真。子。一葉。子を訪ふ。放談。時。博文  
館。馬。君。の。官。内。を。訪。ふ。中。々。見。ゆ。宿。あり



三時におきて蓮  
玉を著の著も  
今正に湖上の雨  
中々雨らし

て科子もは下をりて、事君を出で来れり、夕首を  
れば所君是の地何は拜するを日得るなり  
されどお化粧の物なりなりき、白山社の市ある  
通り丸を掛け、片所へ出て温泉の跡を平  
肩二子に別れ、家へ歸る。別るよりも  
と夕を笑る。

六月八日土曜日雨降る

朝九時頃起き出づ。バルザワウの二人兄弟を續  
み始む。中々面白し。晩にお女まゝりて静岡の小  
松原子余の事を頼み宿す。たれば履履書も  
認められよといふ。即ち、晩食後暇を著く  
豊川に逢ふ。英文花子日本文を話へよといふ  
歸る。後直子例の自転梅の清書を取掛

る。於一時過就眠。

六月九日土曜日晴

朝九時頃起き出づ。自轉梅の清書を午前の内  
に終る。お女まゝりて二人兄弟を續  
み宿す。中々面白し。晩にお女まゝりて静岡の小  
松原子余の事を頼み宿す。たれば履履書も  
認められよといふ。即ち、晩食後暇を著く  
豊川に逢ふ。英文花子日本文を話へよといふ  
歸る。後直子例の自転梅の清書を取掛

六月十日土曜日晴

朝八時頃起き出づ。お女まゝりて二人兄弟を續  
み宿す。中々面白し。晩にお女まゝりて静岡の小  
松原子余の事を頼み宿す。たれば履履書も  
認められよといふ。即ち、晩食後暇を著く  
豊川に逢ふ。英文花子日本文を話へよといふ  
歸る。後直子例の自転梅の清書を取掛



深き所が深きものさうさうが如き。勿々子讀下したれ  
はサの鼻息の仕は一言も下すを得ず。  
只カイト、チフ、アイド、ル子スの行の滑稽自らして愛を  
る。ゴヨセフの鼻息ある、アガエの母の舌を、  
事と云と中々よく描き、出されたとしと思ふ、  
ウツンの美色、フヒリツプがマツクス子ある所、  
子讀者の脚を引くたる所、鬼の角、大家  
の手腕、唯の全海の上、若し、横の思  
ある。暮方、木を討ふ、不を、けは、池畔  
消遠者、雨を、たたる、雨を、向、向  
の人、烟を、并天、祠子、緑草を、  
人を、歸家志、中、海竹、来り、子、一、  
を、便す。山、廣、の、手、紙、接す、彼、何

と、思、ひ、て、書、を、定、せ、る。我、胸、は、鼓、を、  
嗚、呼、彼、は、今、人、の、妻、あり、此、不、對、て、は、我、は、大、心  
せ、る、可、ら、る、もの、あり。ま、彼、は、清、く、處、女、  
て、は、ま、だ、し、は、我、は、生、を、深、く、思、ひ、  
は、是、非、其、の、思、ひ、の、情、難、自、滅、却、か、  
可、ら、る、ざ、れ、ど、我、は、何、と、云、く、  
へ、引、き、定、り、せ、る、如、く、  
ウ、ア、ン、ア、ウ、ト、ウ、ア、ン、を、  
あり、止、め、よ、我、が、お、す、  
心、を、改、め、は、合、意、す、  
六月、拾、壹、日、火、曜、日、晴  
朝、は、霧、地、へ、行、く、午、後、は、  
夕、陽、の、光、を、借、る、草、を、



富を訪ふと犬を捨て、主人は腹痛を  
大弱り。是中より、子首、漱之、瀧子  
あり、犬子人生問題、在、徳中、歸、  
よはたき時、あり、

於二日水曜日晴

朝、築地へ行く。午後は又築地へ行く。  
也三時、過、秋、骨、藤村、禿木、来る。晩、  
外出志、柳、村、を、訪、び、大、  
過、一、三、葉、女、史、を、訪、び、不、在、あり、

於三日水曜日朝晴夜雨

朝、築地へ行く。午後は一葉子を訪ひ  
去、を、得、る、五、志、  
自、山、の、富、を、訪、び、  
難、く、細、部、途、  
十、島、意、之、氏、を、訪、び、不、在、

あり、  
夜、本、所、入、行、り、夕、飯、子、を、送、り、

於四日金曜日晴

朝、築地へ行く。午後は時、  
秋、書、を、出、し、  
有、理、の、青、年、の、會、合、大、  
歸、家、  
家、を、訪、び、  
大、  
背、古、  
志、の、出、  
於五日土曜日雨

朝、別子、  
解、  
積、







あ然く、夜は諸所を散策す。雨を衝いて  
歸る。こしはたゞ時ありき。そののちより  
は中を校の運河に於て、おぼろは丸く、  
あり、家の構造は、本校の大可なり  
あり、三年の事を思ひ出さる。今昔の感も甚だ  
い。

初夜に、はつきり、  
まを、し、柳。次女あびたり。

於九日水曜日、  
此の朝は、茶畑へ行く。三州の、  
母より、を料方端の、  
程で、  
浅藤に、

といふ、今はえより、  
の母を、  
は、  
の女子、  
の件を、  
相手あり、  
頼す、  
おぼ、  
う、

北日本曜日晴

午前、  
の、  
コングリ、



不達す。生日請願書所大凡八十頁。

廿一日金曜日晴

午前九時築地を達す。福言教團年會の齋禱  
を志す。於寺時湯之川の宮の行幸。其日合食の馳走  
ある。二時頃歸宅す。三時湯入浴。歸家は眉山子  
妻の居たり。少時雜誌の後。弁天祠を参り。蓮  
葉ま青山嵐を吹らる。清香衣袖を袂裏に神  
符をば眉山子と受けたり。池邊を歩かし。無陽枝  
を登り大学の鐘門を入り。赤門のぬけ。台所を  
女を降りせしむる所。柳一本立てり。春をよ乱  
りわしく生じて。延びて髪を乱し。肌荒れたる  
女の似たり。我眉山子を顧み。人生の羨  
のはのちを嘆き。傳通院の墓を地に入る。前

田氏の首を時よきりて。眺むれば。大空の赤。壁を  
血上緑樹の。ある点。在志。仰げば。夕暮の空の色。  
緑の色。あやう。の。青。道。の。相。對。照。る。と。  
一層。知。を。ま。し。白。雲。の。う。す。も。の。を。空。に。ひ。き。  
可。人。を。ち。ら。む。や。う。の。青。空。の。散。交。す。る。は。  
そ。ら。の。天。才。輕。四。柱。を。思。ひ。起。さ。し。む。雨。を。合。せ。  
雲。の。根。を。合。み。し。や。う。の。空。を。空。し。き。波。を。空。  
の。彼。方。の。波。を。行。く。夕。陽。の。光。は。光。り。五。輪。の  
光。を。ま。す。の。す。の。の。茅。草。を。照。ら。す。あ。ど。何。と  
お。く。心。沈。み。行。く。思。ひ。ど。す。あ。る。幸。堂。の。信。が。あ。る。  
枝。葉。極。は。今。は。緑。葉。手。あ。や。あ。け。て。生。か。す。生。か。す。  
り。て。これ。も。か。女。の。人。の。妻。と。あり。あ。れ。未。を。思。ひ。  
む。る。の。種。さ。り。眉山子云わたり。一蓮花。生。



と書きたる草をあり、情死なむと思ひし。此  
はまの掃の巡しの草をありと考ふる人は余の如  
り、君らんかゝるを尋ねしに、室の内に入りしと  
相告り古墳の向を山より行けば、雨をよけるぬ  
の本の屋根ありて、鉦も備はりたり。一は儀  
といふをたのといふ、其他の二三の草と  
何となく静思を誘ふ心地なり。眉山子の寓  
ハ三身可れば黒川邸あり。晩食を御座せられた  
後、眉山子出たき後、眉山子の書きたる  
身の上は、眉山子歸り、眉山子の書きたる  
すゝ道み、於二時を定る、瘋癲院の大鼓怪  
きころを傳へて、眉山子とて立見あり。評  
丸山子出で、車を得て、眉山子へ急ぐ、車  
まは支

那を行きたるるもの、嚴寒の恐るる由  
を我に傳れり。

廿日土曜日晴

朝は九時あり、コングリブの書きたる始り  
午後、時を十分過ぎ、眉山子の書きたる  
むは二十日、晝食後、通めて赤書の鉦筆を  
買ひ、眉山子を訪ひ、眉山子の書きたる  
せられ、時を過し、眉山子の書きたる  
ければ、眉山子と袂を別して、眉山子の書きたる

廿三日々曜日、曇り少雨

朝横井氏より、眉山子の書きたる、眉山子の書きたる  
甚都合ありと、午後、眉山子の書きたる、眉山子の書きたる  
眉山子の書きたる、眉山子の書きたる、眉山子の書きたる







朝は八時迄離席、食後は直するクロイツキエハ  
ナカを讀み始め、頗る凄然と一層同感を表  
す。四時、計りておた二時より一時迄まで假  
睡をす。二時迄入浴す。歸りては又餘念を  
くソクタクを讀み、結句午後六時迄の至る  
余く此の書に達す。お本おれば此日は百八十八頁  
を讀みたり。飛騨の人情の深刻なるは、  
こゝに於ては、社会の上の最普通の習慣の内、恐る可  
き悪を感ずる由を痛感する。とある。痛快なる  
おやうと、此の書の悲愴の感をも引くる。是るべし。  
此の書の趣は、社会の上の悪の人間世者  
の悪の、我敢て之を知らず、一善一行徳べ

て罪悪を伴ふべきは、人生の要は何なるの  
ある。悪は必ず不可なり。善は、何故か人は感ずる  
事、不可なり。作られたる。善といひ、悪とい  
ふ畢竟一の都合のみ、便宜のみ。人はおふくと  
今、およく大なる善くは、悪ありたる目的のため  
作られたる。おは、我は此を知らず、  
人は空の野なる者の、人生は目的なきもの。  
我は、今此を語るを得ず、されど、人生は思の外  
に、価値なきものも知らず。

世を日本曙日朝来雨  
朝は八時迄離席、雨中激あければ、暫特行  
く、此の思ひ、到底  
止む可き事なきと思ひ、定め、於差時迄家







挨拶せず。彼の云ふ所は依れば部屋はよへられず  
と云ふ先づ詮はる事と云ふ。下女など子  
挨拶をまじり、晩食は随分不潔なる所と云ふ。下守  
の言葉も食せり。実にも挨拶をまじり、見る者  
聞く者強て面白くも、洋人を相手する者  
は一種の厭ふ可き臭味あるを云ふ。バルガ  
ル人を捕へて洋人の騒ぐに随分の醜態ありと  
思へり。夜十時頃に至ると荷物をまきり列ぐあ  
る二室より搬入が去り寝静まりしり云々。

廿日金曜日 朝は雨十時過ぎる時  
此日朝五時半頃起き出で顔を洗ひてを屋のへ  
かけば誰もまだ起きず居る。食後別室に  
るもよく居る内ホーニベンゲンと云ふ人鳥を弄す

るをみる。此日は画師といふ、筆跡がよく画  
白味あり、館屋のスケッチを取るやうあり。帳  
場では中々評判悪るもの、部屋もまたよくする  
と云ふ。丸い菊根おたりの温泉水宿の帳場の如  
き所は座を運搬せし一日を道すがらすりまわす  
おは、廊下を運搬せし、車手紙を弄くるを教  
まね二通書く。又、直書者を頼まれば此を直書  
す。書合も後も猶此をまじり、二時頃に至ると  
此の如く、本物のものは到底長く止まる可く  
まじり、思定の本日は、一、二時頃、然謝志  
るもの歸る可きを決す。四時頃、之を主に決  
る途に、朝歸るべきもの、定まる。六時頃、  
友野来る相携へて、館屋へ行くは侍の態



の料理法はのしも旨いから、**飛騨**山は青々  
とて信州へ大谷川、河音のよりの郷を  
前山杜鵑の芳名高き、**衾**の物をとね羽儀  
を著自たるふまだ香味肌を徹しとむしる事なきを  
覚る程あり。か時談話の後袂を別れ、家  
に歸せんともする月、**藤子**出ると、**山**の空に  
突立ちの所あり。と物あり。ホテに子歸る  
内と外と成雅そ、**雲泥**のまをすま。夜は時  
暁に至ると、**眠**に就。  
廿九日土曜日晴

此日は朝七時荷物を車に乗せ、**新井**ホテ心  
を出し、**金谷**ホテ心の所まで、**女野**を流はし、**ま**  
**み**未だ起きず出で、ふみぞ、又車に乗ると、**か**  
**か**

須臾もたると、**車**を降り、**女野**跡より  
来る、**金**の**林檎**を、**流**車は、**八**時前  
に出る、**宿**の山と、**人**と、**車**を、**男**時  
山は、**カ**グ**面**の**林**、**鹿**子、**ま**て、**野**目る、**空**の  
色、**心**大に**躍**る、**此**日、**ま**を、**捨**て、**歸**る、**心**  
**思**へば、**い**と、**心**を、**舞**き、**心**地、**も**せり、**今**車、**の**  
**人**は、**心**地、**よ**く、**眠**れる、**今**は、**林**檎、**を**、**捨**す、**列**  
**車**は、**暫**時、**て**、**宇**都、**宿**に、**ま**着、**車**は、**乗**  
**換**る、**日**先、**傳**車、**傳**の、**見**たる、**日**先、**傳**車、**傳**  
**も**、**今**、**車**、**の**、**後**、**の**、**方**子、**乗**り、**込**り、**向**る、**手**  
**籠**を、**入**れ、**ら**れたる、**五**十、**位**、**の**、**日**カ、**柿**色、**漆**の、**後**  
**衣**を、**着**か、**ち**る、**が**、**白**衣、**帯**、**短**の、**人**、**對**面、**を**、**せ**  
**目**人は、**人**相、**も**、**た**ま、**い**、**一**、**二**、**三**、**何**を、**の**、**り**、**し**、**て**



斯くは國法を撃つがごとしや、退失の故きもの  
それと知るよしあられど、衣長の心はさびらるる我  
胸の湧ききまひり。列車は炎日を衝いて急  
げり。因人は古河まで去れり。方根の大河は今  
は晴れやうな流流。橋本あたりは青山水源の  
子連思する。げは心晴るる。はりの眺るる。し  
大官の青林故ふる味あり。甲仙道の汽車も  
待てをばする。か時、緑林まの路のりも  
のけり。車は一時、時を分るといふ。上野子  
女車を備ひて奉迎する。家も歸る。入浴  
信守る。川上眉山子をかむ。雑談をあ  
市野さる。ありいと。慶しく歸ります。  
廿月々曜日晴

清所へ手紙を出た。午後、来未訪来れり。相  
共、七軒所へわく。鳴山、上丹まあり。屠子まを  
る。あゝ。ししを。あゝ。まあり。家も。云を。讀む。

七月一日月曜日雨

午後は眉山、ふ島を。叩き。是方まを。放談  
す。家も。歸りしは。雑書を。讀み。あゝ。のす。

二日火曜日雨

築地へわく。歸途は。菓子。を。買ふ。家も  
は。別。あ。する。も。あ。く。是。り。ぬ。夜。の。介  
す。る。の。而。路。と。い。ふ。わ。説。を。記。す。

三日水曜日雨

別。あ。する。も。あ。く。是。り。ぬ。夜。の。介  
す。る。の。而。路。と。い。ふ。わ。説。を。記。す。

四日本曜日晴

別。あ。する。も。あ。く。是。り。ぬ。夜。の。介  
す。る。の。而。路。と。い。ふ。わ。説。を。記。す。



午後一葉中史を討て放談す。眉山子を訪ふ  
み石をあり。福島氏を訪ふの時談話し歸  
れば鳥崎の今来り老肉を聞きて。跡を信子  
て七軒所へ至る。山鳥崎を家へ伴ふ。柳村子  
来る。相き子池畔の明月をおる。天木の之物を  
叩くの時談話の。後池畔を一周して歸る。  
五日金曜日の晴  
此は築地へ行く。午後菊池氏を訪ふ。不在  
ありければ去りて眉山子を訪ふ。夜遅くまで  
語る。土曜日は十時迄ありし也。  
六日土曜日の晴  
朝早く鳥崎の来り。兄の子遊けりと居る  
気の毒なる事あり。拾時の伯友次郎

来る。一時頃今人来る。雑書を渉る。夜子  
の月明の言葉あり。池畔を去り老毛ん本を訪  
ふ。不在ありければ去りて柳村子を訪ふ。  
七日土曜日の晴  
朝早く本来る。午後知恵子の子のあめ。七夕  
のちんちんを書きまゝに書る。夜子少く毛ん  
本を去る。柳村子の寓を叩きして去る。  
日月晴日雨  
朝二時頃起き出でぬ。書次人少く氏訪  
来れり。眉山子次を来り。二時頃少く毛ん  
本を来り。眉山子片を射。始のころ迄  
老れり。とて痛く喜ぶ。去りぬ。夜子入



りとは別、よき事しるもふくこ易き也

九月火曜日晴

書の程、別、さきつるものもふくこ、思ひ、

夜は、つる、本、柳、村、二、子、を、手、に、一、冊、未、

史、の、寫、を、叩、き、し、致、談、松、時、を、多、り、ぬ、

十日水曜日晴

朝、无、本、来、り、ぬ、午、後、は、雜、書、を、讀、み、散、

ら、り、晚、方、西、天、子、果、烟、す、ま、り、し、く、ま、及、り、

て、人、々、大、る、の、さ、う、と、立、駭、ぐ、る、急、げ、つ、ま、を、

で、一、葉、文、史、の、寫、を、目、掛、り、し、住、む、道、を、先、

本、の、逢、へ、る、眉、山、子、の、寫、を、叩、き、大、事、に、い、へ、

り、く、の、巡、り、直、に、叱、ら、る、九、時、は、一、葉、文、史、を、

は、ん、と、ま、り、る、門、を、ま、り、た、る、杖、を、引、返、

へす、家、の、歸、り、は、直、に、就、眠

拾日本曜日晴

朝、は、一、葉、文、史、を、訪、ひ、ぬ、午、後、は、眉、山、方、を、

晚、方、ま、で、雜、談、す、首、者、方、歸、家、別、の、事、

事、も、お、こ、し、夜、を、つ、ま、り、ぬ、

拾二日金曜日晴夜雨

集、ま、れ、へ、り、き、ぬ、午、後、秋、日、は、福、島、氏、訪、

来、り、ぬ、秋、日、は、我、お、も、ろ、う、の、池、を、平、河、に、送、

る、へ、き、由、を、教、へ、し、首、者、方、干、秋、氏、の、流、智、の、

中、を、校、子、四、拾、丹、の、に、お、る、こ、が、り、の、ま、や、と、り、

手、書、を、送、せ、り、夜、の、入、り、星、野、夕、影、を、右、来、

り、報、談、の、時、の、後、去、る、

拾三日土曜日日雨

手本の寫も  
澤瑠璃を法に



朝は干秋氏を防び滋賀の件の周旋を依頼す。横井カ自を女子存完の方ひこ種々辨談志お余をけび久瀧の懐を慰む。藤沢左のま校子行のんさする由の話をききけり。相共るの駁台まで来る。夜は別るまのるもふく言者れぬ。  
於四月之曜日 曇云  
此日は午後二時頃藤村の寓を叩きし。雑行す。歸れば秋日某とし申あり。これば藤村も若の上田氏を訪る。此の秋はふる毎に由相携りて家子歸る。秋日と懐を同のこたつて月流の流子をぬぐる。

於五日 月曜の 言の 曇云 夜の雨  
朝の時の一葉未だまをけび雑談数次。於二時頃眉山子の寓を叩き大に談す。文津氏大に折理を交る。余等も亦君のの世に界を吐けり。地味のりも物を踏んで七軒の才めり。秋と共る。物上ふさせし笑談す。蓮花早二葉も破らむとす。さるの心たり。さるの心は西鶴集も取り出でて讀みぬ。柳村子集れり。  
於六日 火曜 曇云 晩雨  
朝より書きまはけ何のをもたさず。午後は西鶴集を乱讀す。夜ふくも同じ事をさるぬ。白石鷗子へびて文書の界を平す。







まると此の我んはいつと昔のののののの  
七裡の法線徒らな激走けむ、静思筆硯  
おぼゆるするこのあはすありぬ。夜は  
只手元一き、難書を乱讀せり。

拾、日本曜日一雨

朝七時の過寝起、朝顔のそまき、出た  
たは去年のまきあり去れど人はい、  
一時過家を出で喜んだ下る、美濃紙を買  
ひ、勸違より、練道馬車を買ひ、日本橋の  
下車、沈滞の中をますと、お世所より、  
川原両換店を、お世所用印紙を四見ひ、  
撥を揃ふる、櫛櫛、異なり、面屋の  
ぬらやまむむ、女の人、二三人侍り、店あり

この兄のさるは因はれしおとると思ひお目づれば、  
多かりの感懐もなき能はむ

東よ、存、廳、第

三課へは、お役人、我装の粗野なるも、  
りや、免、許、状、を、出、志、す、ま、子、領、事、を、  
れば、免、許、状、を、出、志、す、ま、子、領、事、を、  
よ、と、い、ふ、お、志、す、ま、子、領、事、を、  
呼、此、の、僅、々、二、枚、の、紙、片、を、得、む、が、為、に、我、は、  
い、ろ、の、苦、み、を、出、志、す、ま、子、領、事、を、  
殆、んど、要、紙、を、建、立、す、ま、子、領、事、を、  
夜、と、考、へ、此、の、免、許、状、の、る、を、心、子、領、事、を、  
し、る、は、一、な、と、考、へ、ま、子、領、事、を、  
は、敢、果、お、志、す、ま、子、領、事、を、  
我、身、あり、一、は、の、り、僅、さ、る、る、の、の、の、  
て、も、ん、を、は、力、さ、す、る、お、志、す、ま、子、領、事、を、



我哀ふる老親をて居るの家あるため食  
るの食ある志あるもの此の免許状を  
みよる力ある志ある人は我をが  
志ある云へ我は能く何もの恥ぢ  
をせ路にあそくたる痴漢なりと笑ふも  
我は又我信する所あり我は今や  
くとも世の子を對する一用にも  
るものありおと胸子思ひの  
何時ある日平中過子校の  
た浦氏及び垣内氏を筆して  
頼り履舞の書をも書き  
於二時の歸宅新聞を讀み  
び主佐への書はを恐むれば  
早三時

くハ活志衣服を更ぬ一葉木  
不をありければ去る眉山子  
雑話上向敏氏を方か  
見る雑談の後九時頃  
食するをば唐くませり  
きつと甚志

拾九日全曜日雨

朝七時湯を起豊川へ行き免許状を  
新聞を讀む雨多たる雨日  
の露をみる書けり

廿日土曜日曇

拾七時湯を起相付を七時  
過藤村来る三個を携えて  
眉山の富を叩き



五時の道まで雑話す、二氏を以て承るは其の時  
後新しぬ、若かりて後我は雑書を以て讀せり  
廿二日の朝は朝曇午後晴

此の朝は七時の起き出でぬ、三時頃よりバウソンの  
カインを讀み始む頗ぶる面白き晩まで約四  
頁ほど讀みぬ、夜より上田赤白二子来る  
九時頃実考して古今は手を讀みぬ

廿二日月曜日

カインを讀む時より書と信じて二百餘頁を讀むは  
偏を讀み終はりしあり、ルニワアといふ悪魔  
のいふ所一々尤あり、カインの懷疑此又自然なる  
人の罪といふものは如何し作られしや、神の  
等ば神は吾人を作るもの如何なる者か

任き●持りの。彼はこの果のゆるぎをを作したる  
のせらば吾人何●正を踏むの責任を有せむや  
天地は大道理の存するありし、神は既に先を適用する  
て人間を支配するものありしや、即ち法を換へては  
神も亦此大法の支配する。此の神は吾人を作し、養ひせ  
たまはば、神は無慈悲なるものなるべし、罪を治すもの  
へまやうの人間を作して、罪を犯したれば、是れを冥府  
へ送るとせば、我神の公平なる者の、何れなるものをも  
疑ふ、我神の善人の何處に存するものを知らむ。  
人生は知る可なり、人の運命も亦運命の中あり、  
誰かは生るが、懐疑者たちども、彼の宗教を讀  
する輩は、この疑ひ制限を置きて、手先きをも見  
む、むじの心を勤むるもののみ。彼等、此を何ぞの



知らむや。於二時過日幸中卒の藤村といふ人より  
明朝八時頃来れと電話話まこと越志たり。お安  
知恵子、父他の者の眞眞を見せの教書書を貴  
受く。三時頃入浴。元川へ宛て、手紙を出す。雨は  
まさしく降り續きたり。百女の夕なれど何と申さ  
物さびしきものあり。ゴサツクを讀みたり。

廿三日火曜日晴

此朝は八時頃日幸中卒校へ至る。同去る  
松浦氏を父の家の名を待たせたり。と申す  
車ひき久堅所へ向ふ。安藤氏より見れば稜  
父の山嶽の姿。姿まじく西天の白雲色頗る  
ありし。松浦氏は金子を根の平紙を置き  
れたり曰く「馬場氏を採用する子定むれ」と

廿四日水曜日

かゝ都合ある故に任命の期は来月申回復  
志ありしと。眼を歸す。眉山十を討ふ。  
清子、松浦氏申すあり。松浦氏の時、松浦氏を  
時頃、松浦氏を助氏申すあり。元川松浦氏  
了。松浦氏の試験は好進。早より志由あり  
四時頃、向島へ行き、清子を討ふ。種々  
難行なり。歸り志は六時頃。眉山、秋分  
眉山の三々。我官内、佳本まる。夜於時  
まご放す。

廿四日水曜日

此日午前於時頃より晩まで子トルスリ  
ゴサツクを百頁讀む。此の生を讀み終  
べたるなり。美方より眉山の子が賞を











七時頃雨降り来りければ眉山子と別れ赤  
を討ふ子不在あり 藪蒼向葉なる立空のり若葉  
を食せり。家父は放談の後拾時頃眠り就  
く展轉反側眠り入り難有り者  
辛月大暁日半晴夜雨  
手前九時頃眉山村を宿ふる不在あり根  
倉をぬけて歸る七軒町のや自由あるは少  
す。池畔を秋骨と秋も分り。蓮の花は早  
咲き出たり。赤さ色の青葉葉ののりかまが  
るぬらぬらうるはし。家父は假寐空を  
を肆やりの日を首看らう。影の雨を  
神のり。是すおや申文字を小田原子雲の計畫  
ありとふるをいなり。文島子果て三子

手を主と取る。表は衣類ふるつらうして直衣  
まらう。出揃う。雑沓なるしと云ふべし。  
夏衣の軒雨滴さむし夜の雨  
朝顔はまた咲きけるけり人はいざ  
夏衣のまげりのみわく用心ある  
五月雨の中菫の音野面を流るる  
五月雨や時雨の音の音の音の音  
朝顔の音の音の音の音の音の音  
本心くらしの音の音の音の音の音  
敵の柄の夏衣をぬく野道一の音  
去年のまらみ花をまきまはる  
蝶のまらみ花をまきまはる  
九時頃よりブラのビスメターヒースを讀む。



世一日本曜日 日曇り夜雨

朝は曇りの日 其の雨を射る午後 日曇り  
夜は雨 一日曇り 女まを  
小倉よりの子孫 さらんせし 久保の  
てはまふす 報法の後 歸るなり  
自日本曜日 日曇り

手前が 日曇り 日曇り 日曇り  
去つた 是の 日曇り 日曇り  
之浦 日曇り 日曇り 日曇り  
と暮る 日曇り 日曇り 日曇り  
す。

二日全曜日 日曇り  
朝は曇りの日 日曇り 日曇り 夜は雨

本日は曇り 所を散らす。

三日土曜日 日曇り夜雨

朝九時過 火倉をたふす 雑注 数刻の 夕べ 静  
山中 川田等の 雑注 雑注 雑注 雑注  
は老祖母一人ありし 是れ 雑注 雑注 雑注  
うらみあり 志由なり 雑注 雑注 雑注  
雑注 何となく 凄然たる 思せり。 午後四時過  
歸途に 雑注 雑注 雑注 雑注  
自日本曜日 日曇り

朝は曇りの日 日曇り 日曇り 日曇り  
雑注 雑注 雑注 雑注  
中せる アーケスト は 雑注 雑注 雑注  
とふ人の 雑注 雑注 雑注 雑注







河を見る田圃の青々たる、牛入あたりは  
たどの夕烟の色み去らるるほど頗ぶる面白  
みやう七時頃幸娘、数著向來の良事す。  
我多る之秋藤二人と放談志彼等とも送り  
池畔よるる。

七日水曜日本晴

朝は晩く起て出でぬ。一葉子を訪ふ

雑事をしし清す。

日本曜日本晴

朝外山氏より書状を持参りぬ。第五高等學  
校の教員の名簿あれば、候補者として我々  
を甲込に置きたる由を報じたり。九時

前手本事なる連日とも相談の上、運社子着  
手す。たきよし決志。手本と云ふの二葉眉山三  
子を訪問の接牛込より外山博士を訪ふ。不在  
ありければ、歸郷す。豊川五を池比元徳とい  
ふ陸軍大に討ふ逢ふ。

九日金曜日本晴

朝八時頃外山氏を訪ふ。在室を神田氏を訪  
ふ。門生の推挙を云ふべしといはるる。館の  
所ある乃武氏の官舎をゆりし。引付杖を得て  
駒入一擲の所ある。櫻井氏を訪ふ。不在ありけ  
れば、歸郷す。上田柳村を訪ふ。不在あり。手  
本を富を叩き大善悪論を戦はす。池畔  
を歩志。并財天初より善人志、蓮花化を見、歸







於三月五日書を讀んで此を呈せり。

於三月五日朝に奉地へ行き秋舟を訪ふ相携りて

フと云ふを訪ふてかき手助をさす。松壺時

過三橋よりして樂山堂に於て女子法を

赫然と砂塵を踏んで白雲をさす。少言を

の言を訪ひて五時過時者之歸

途に就けり。其本を討ふに不在有りければ

於三月六日大暁の時

朝に其本を尋ねり。其推して丸筆を以て

美術画報を以てし。マリーヤは集まると云

す。本原を以て計物屋とて。秋舟を以て本と

す。本原を以て計物屋とて。秋舟を以て本と

す。本原を以て計物屋とて。秋舟を以て本と

す。本原を以て計物屋とて。秋舟を以て本と

す。本原を以て計物屋とて。秋舟を以て本と

す。本原を以て計物屋とて。秋舟を以て本と

す。本原を以て計物屋とて。秋舟を以て本と

す。本原を以て計物屋とて。秋舟を以て本と

す。本原を以て計物屋とて。秋舟を以て本と

す。本原を以て計物屋とて。秋舟を以て本と

す。本原を以て計物屋とて。秋舟を以て本と











とよみ柳の咲松といふ四輪以上の大板三葉の老  
女と共の同車す。車は野すり、川すり、山見へ  
雲面白志馬崎、あたりより見れば、秩父素  
棧名、宿山やうらうら、のり、ん、ん、前橋、下  
車す、多子、継付の田舎、懐の如き、三入、川、下  
惟、うれ、つ、出、れ、の、侍、子、ま、り、す、鉄、線、車、と、い  
ふ、子、の、想、え、書、と、食、を、あ、す、一、家、中、に、交、り、し、て  
馬車、の、車、り、後、れ、た、り、一、時、時、名、細、海、と、い、ふ、鉄  
道、馬車、の、マ、テ、一、こ、ま、ま、で、車、を、駆、る、前、橋、の  
市、中、は、あ、ち、う、く、気、が、利、い、て、居、る、や、う、ま、り、糸  
の、取、引、の、盛、る、所、あ、る、べ、し、銀、り、の、ま、た、あ、り、  
川、す、り、し、水、満、ち、と、市、中、を、掃、母、り、し、橋、あり  
鉄、道、や、う、て、こ、子、架、せ、り、橋、橋、と、い、ふ、馬

車は車する物の車、刀位、ある、志、一、頭、の、馬  
此を挽く、さ、り、車、を、あ、り、し、ま、り、志、あ、り、  
む、色、蒼、ん、ま、り、藪、さ、ち、り、の、其、合、伴、の、志、女、と、も、我  
等、不、首、切、の、車、中、の、二、車、あ、り、し、一、車、は、七、四、五、三、  
髪、は、油、気、ぬ、り、の、銀、を、五、五、志、金、に、の、り、と、ぬ、り  
上げ、ち、る、櫛、を、は、差、あ、り、し、一、車、は、未、妻、者、  
と、ち、る、道、田、車、の、下、の、あ、り、し、一、以、を、ま、り、た、る、  
如、手、道、を、さ、り、る、さ、り、し、赤、城、の、山、は、右、子、首、の  
く、棧、名、二、つ、山、後、子、と、羽、平、色、と、い、い、我、子、也  
ま、り、この、道、志、道、子、茶、車、を、押、す、者、あ、り、し、前  
ま、り、は、ま、ほ、ま、り、は、この、妻、車、上、の、着、者、を、帆、の、如  
く、ま、り、め、し、張、り、し、五、つ、は、り、の、お、田、ん、の、日、の、里、子  
ち、る、この、田、利、志、を、な、り、し、此、れ、も、人、さ、り、し、我、は



今数里の路をわくも馬車を借り切ると、倣然  
きくく子、彼等は此二時位の空熱のさるるを  
車をちりて汗を全身を洗ふ、彼非ざるの、我  
あるこの、一種云ふりいふるの感懐、我胸に溢れ  
車れる子、懐を轉せんと他の才子、眼をこぼせば  
生海の、彼の蒸熱者のさびしげある姿、こ  
我心を動しぬ嗚呼此れも、折角稼が志を  
を病みん女子、是はねばあらず、其病も病  
より得たるものありと、泣くもの、如く、  
只押志のけらるるや、さるるの、  
川水は澄々と、青く右岸は、藤まき、  
草木青々たる、左岸は、田路、村、  
く棲る、山脈の、林、  
連らるる。治川といふ、

この、憩心志、車を傭ひて伊香保へ向ふ。坂路  
石より、急曲をすれば二人の車夫も流汗、衣を洗  
ふの如き、御影の村より憩心志、伊香保の、  
きて車を止め、憩みれば、赤城の山脚は、  
延びて、  
足、  
立たる、  
我は憩心志、  
は羊毛の、  
思へ、  
草、  
沈むる夕、  
六時、  
伊香保、



直地藏河ありて其のほとけの丘藤夫人の子  
岸にお安の病氣の話を一々ありたり。干明  
仁泉寺に泊る。山々暮れにわく。有るる。面  
白志相根とは尋ひて旅直の存板迎ふる。元  
一こしあり。林氏の屋上は山崎の山。我は  
疲然たるをびて水車の手をひき。新なる。新  
今日の道々の世をみる。記る。はく湯  
は白く濁りあり。硫気多ければ手拭は皆赤  
たまる。雨降る。如く。湯の  
流る。あり。松屋時。就着。  
廿日曜日雨降る。但志書。出たり。あり。  
廿六時。寝起。湯の湯。口まで。熱。赤。す。山。産。の  
上。わ。く。や。う。あ。る。湯。の。二。高。寺。は。石。子。あり。

二つ山は。山。の。ま。り。わ。が。て。湯。を。の。り。け。は。今  
く。集。ま。り。川。の。濁。れ。を。ク。ク。の。た。ら。り。は。ま  
た。ま。り。し。待。を。吟。ぶ。山。の。男。と。は。ま。り。た。ま  
ま。の。か。歸。る。朝。令。は。屋。曲。を。向。山。あ。る。岩  
崎。の。別。子。坊。ふ。持。の。ゆ。衣。を。着。た。る。身  
體。か。ぬ。女。中。出。ま。り。し。今。ま。二。階。に。安。本。内  
木。構。造。敷。ぶ。る。美。ま。り。花。敷。の。り。は。馬  
の子。また。の。山。影。手。の。取。る。の。如。か。時。の  
後。道。守。の。け。し。た。を。下。れ。ば。一。子。を。出。し。り。あ  
り。本。内。を。四。子。奇。ふ。軽。き。人。の。如。志。松。野。度  
湯。を。下。り。し。袂。を。別。心。任。ま。る。保。神。社。の。登  
り。山。子。を。登。り。す。山。の。歸。り。し。橋。を。の。り。の。た。ま



中、一居士打合せの都へなれば、建三川の歸せよ  
との御も、草鞋を穿きて、山向ふ道  
々、杖を揃ひ、女郎心を折り、事の中、最  
く、山は御座の、衣、庫あり、草はまの、と  
志、虫の、情、静、子、を止め、耳を  
ゆくらば、世、金、去、身は只  
天、子、軍、び、去、れ、と、する、が、心、志、の  
或時は、道、跡、の、腰、掛け、或時は、空、清  
の、ほ、る、る、を、志、息、を、ら、め、ぬ、や  
う、く、遊、り、か、近、く、す、と、赤、城、の、山、色、ま、ま、し、く  
翠、の、定、り、の、山、是、の、心、と、や、け、む、山、脚、悠  
と、ん、長、く、引、く、と、ろ、う、刀、根、の、長、流、は、さ、さ、り  
一、ひ、ら、の、白、布、を、引、き、ら、む、や、う、の、草

路をめぐり、流れゆく彼方は本梅のころれ  
まるまど、詩、興、さ、ら、る、の、流、り、き、出、づ、ま、は、の、あり  
道を、因、り、ゆ、り、一、音、の、時、り、子、ま、り、丸、刀、と  
いふ、御、の、想、ひ、曲、り、は、い、と、く、ま、り、書、き、合、は、中  
本、内、の、ま、り、并、た、を、世、に、ら、ん、を、合、す  
十、時、の、馬、車、を、借、り、と、登、す、山、路、か、り、あ  
ま、る、の、雨、を、さ、る、の、浮、き、こ、ら、る、の、心、  
豊、の、は、さ、の、ま、あ、お、お、の、底、を、を、合、す、  
高、の、の、所、も、あ、の、一、足、善、す、  
被、といふ、顔、心、ふ、三、時、の、浪、車、ま、ま、る、中、ま、の、心、  
を、三、時、の、心、あ、り、ま、り、湯、を、を、井、南、海、酒、を  
味、の、合、を、合、す、雨、の、那、と、一、時、の、あ、り、  
ち、一、大、の、心、あ、り、三、入、り、ま、る、浦、杉、を、林、合、す



氏入り来る、赤羽の二は矢野氏来る、豊前のは此所  
の二下車志士殿へ向ふ。本内、林西氏子は王子  
を別れ一人燈暗きし童子座しこまきくさ  
る草を追ふ。梅野の園の意やする子所ありし。折  
志もあれ泣き声、病用か耐れおむばりり子  
御言ひぬ。凄惨の懐身を籠る多心地志あり  
七時吹、家子歸れば、お女の病は左まを心配す  
は及ばぬやうあるるを聞く

廿日水曜晴

朝は晩く起き出た、文藝保存會館に第一編  
を置くと此を清く面白きものなりし。  
大抵しはお女の熱の志を志すことし、  
報志来れり、夜は其室に入りしきこむる

廿二日本曜晴

朝は晩く起き出た、午後一、まの女主人を訪ふ  
事多きありければ、志を眉山子を訪  
ふ、後方まで難し

廿三日金曜晴

午三時は外へ出て時を暮らす、藤村来る  
雑言中、時を暮らすの辞止を物す、夜に入り  
り、事のを、けら子元、またんはせ、  
き、三半、字のれ、白、は午後  
九時迄ありし。

廿四日土曜晴

朝は晩く起き出た、日をもくらす、  
あす夕立子、眉山を志す、眉山を志す



去久松浦の内にやうな本たきく服の  
方ありは何と云ふて来たかといふ  
衣斐文をけいひ島崎をけいひ旋するを  
信ぜずし。

廿五日 晴

朝は林と山人来りし。検定試験の件を  
書いより眉山を訪ふ。後江中向山を袋  
取する。好人物の如き。晩方待して歸る。

廿六日 月曜 晴

午前は岡本博士と山人来る。午後は赤井  
氏来る。か時読経の後去る。暮る。秋月  
来る。相共に出く。地図を四らふ。

廿七日 大曜 晴

朝は別。あまのりもあし。藤村と共眉山氏  
を訪ふ。書いりまがはる。午後は地図  
を写す。ていふ。

廿八日 水曜 晴

事は別。あまのりもあし。送りぬ。夜は  
り。言和の雨。朝を。松浦の。何れ。

廿九日 木曜 晴

朝は本浦外山。衣斐文を解。同志。歸。余。一。事。  
室をけいひ。去。ん。村。子。の。夜。は。後。に。  
夜は。あ。ま。の。り。も。あ。し。一。事。を。夜。に。し。

三十日 金曜 朝晴 夜雨

朝は干波。神田。史。を。けいひ。何れ。来。る。一。事。







別辞を述べ奥三川のりりか(福)時(車)を托す  
十二時就其辱感慨胸を充てて夢  
ふらざらんとす

二月月曜日 晴

朝五時三川寤起旅せぬ句を...と車を驅  
る我弟ニの故心する悪化する程を去る所の何  
ともなく悲しくして泣き...わけなく我眼に  
べり、爽涼の朝を切やと車は立ち去るを望み  
鶴見の北ぐく次、西務のぬき、一相降る来れり  
大山の次め、花水の川、ある聖徳の丘とて...  
ぎ行きそ大磯のまねき...は一時過る...  
時...のれき、知重の子の病を...か女が力なく

寝ねたりと去れどを迄二表へ去るはあらず  
九時浴お女を浴せは寝馬ふありの一表ら  
へて...顔の色...  
か時...の山...  
海山の眺...  
陰をくぐり...  
の接又お安の...  
み別を先ぐ...  
傳車...  
ありて...  
流車は早く...  
ふこの...  
の松林...  
行き...  
眼界下開くる



函嶽の清山翠色深く丹波酒匂の河  
原水がみちへ小流布をまきりながら  
流れまゐる。函根定柄・山々は之別  
に停車して木  
葉まわり内、甚だ路を連りたり。同行  
する平  
を打つて佳景の姿を叫ぶ。小田原の  
水は酒匂た  
る井をまき、鴨盟館には秋骨先登  
をまきよ  
迫りければ、二里を越えて佳  
むさま気のまき  
もまき、あまのこもあまのこ  
折角の存の幾も徒  
等より去。鴨盟館は休業中  
ありとこの暫時  
樓上へ休む。所へ出て、通  
りの馬車を待  
ちには此子必なる。早川の河  
辺海に遠くける  
とありいと見ゆる。木の次女  
酒匂をいられ  
る。昔、路のり、三三の昔、葉を  
屋を在方の山

降の眺めを越る。ちと二こやうく  
車は湯をのり、着有す。溪流に流  
る。新山の  
下まき、いへ、つ、馬子まき、  
は五時、此より  
あまのこ、の、か女の、等、の、次女、と、情、け、あ、り、四  
個、ま、き、湯、を、指、す、ド、お、島、身、と、い、ふ、う、う、エ、リ、や  
か、似、た、る、か、女、ま、き、り、て、我、筆、の、醉、の、汗、を、  
ま、き、り、知、り、た、り、と、晴、れ、木、感、心、多、う、少、と、は、社、會、  
が、我、の、さ、ら、や、せ、ま、さ、り、あ、り、さ、り、お、は、成、お、島、  
等、の、け、酌、を、ま、き、酒、と、日、平、酒、を、飲、く、泥  
酔、を、ま、き、地、を、得、す、り、夕、影、と、ま、き、り、  
秋、の、ま、き、掃、却、す、。夜、は、於、二、時、の、初、ま、を、花、を、  
鼻、は、ま、き、と、晴、れ、村、の、無、果、有、用、気、ま、き、り、打、出、る、  
方可、坐、者、の、り、り、り、笑、話、の、内、を、眠、り、就、く







故去雲雀まきり勿心りこ雨来る空雲  
密雲のうす子受あえ山脚のみ明かり  
夕雲やうしひあむとする炊沼津傳  
車博か下車すしやうし山父の家を  
尋ねし久かりる人々子逢ふ夜七時湯  
沼津を後みす月と清志田子の浦  
曲傳包が用三傳の風志おぼるげみ見  
へ志白雲空山獄を色み其形巨鳥のぬき  
すり阿修の四王のぬきまきり世色るも乃  
ばま中つこの業取雲を其形無舞姫の純文袖を  
ひるか入すのぬきまきり月其中をくぐりて  
行くいと面白のぬき伊豆の山と夢のぬ  
くまのぬきまきりのぬき水上の換火の燃火

はりのあるとつたり我をまをれを感  
みるうす早くも車は村らあう里南の  
るを走り山雲の雲まはらう雨を降り  
て名をい浪松の花を屋といふ草まはら  
ある眠ををる。秋接の感懐を海  
あ。

四日水羽晴日晴

朝は五時頃起き出る日の出のけしき面白  
アサノ舞坂をぬぎて山頂の却の眺めを  
見る山翠なり水洋々たり村分りあ  
しき松いくの木のまきり就島津を  
根へ向け電報を打つ浦郡。海岸。澄美海  
嶋嶺の風光頗る佳なり。志。山際をぬき



奥圃の石を踏みし車は走せられしなり車中  
女を連れたる人を見る毎に我一人の心も  
ソリタリある物ある心動けり因に  
り年せ八ある日やけ里みたる妻と  
君車坐るなり来る空席を分ければ二人  
ますこあり夫は妻を愛は熱しなり車  
の動揺  
強きま毎に眉根を聳めて妻の才を  
歎けり  
多きま何やむやさし暖みある心  
見へて床の心  
聖徳の  
ぎは皇太子を通りぬ本陣の川を  
何よりし室大なり長國を  
行く  
眼界下忽ち開けし洞庭湘瀟の  
の  
水湖畔の山影  
我眼  
又

車を揺らししとき少時  
いと寂びれたる所の中  
に城靜かに  
り  
古田といふ書  
の  
人  
舎  
を  
出  
向  
へ  
し  
松  
長  
今  
井  
也  
氏  
方  
へ  
書  
と  
食  
を  
贈  
り  
し  
待  
の  
あ  
と  
か  
け  
し  
髪  
鬘  
を  
さ  
か  
た  
る  
短  
身  
の  
丈  
夫  
再  
今  
井  
ありしと出て来る  
初  
對  
面  
の  
口  
に  
説  
終  
り  
侍  
は  
れて  
校  
舎  
を  
見  
る  
道  
々  
堀  
の  
ぬ  
の  
不  
化  
ある  
は  
強  
馬  
を  
喚  
せ  
り  
校  
舎  
は  
顔  
を  
か  
き  
震  
え  
り  
城  
地  
を  
見  
る  
湖  
景  
強  
馬  
は  
あり  
侍  
あり  
水  
は  
濃  
泥  
た  
ち  
ま  
の  
み  
ど  
り  
我  
め  
も  
分  
れ  
た  
る  
子  
也  
生  
島  
の  
さ  
さ  
が  
い  
浮  
び  
出  
た  
る  
や  
う  
ある  
財  
ケ  
嶽  
あ  
た  
り  
の  
山  
々  
の  
翠  
深  
き  
何  
れ  
の  
侍  
相  
を  
動  
の  
き  
り  
な  
ら  
ざる  
ま  
し  
し  
樂  
々  
園  
を  
一  
回  
し



此所は井伊家の別墅あり志との蓮池を  
めぐる光ふりく一面白帆渡舟夕陽を  
見を歸り来る子まいと床しすし眺あり  
夜は四重所の岩崎橋といふ旅宿に宿る  
涼然万世く何を心得ずさむ九時前より  
眠り就く。

五日本曜日晴

朝八時今井氏を訪ふ相共る若松を過る  
中出畑吉田福永松尾栗田光田等の諸  
氏の逢ふかたのお談ありも時々の愛の持も  
定まりし於二時過歸宿す書こるに  
時假睡を甘れり家談多影眉山一  
葉千顔の諸氏へ記し書けは志晩食  
ちるすりし思ふに可いんさるるはすの

後も猶書き續く今井氏来訪余のゆ  
暇は諸氏の宿所の地回を書き置かれたり  
秀更ふりし河原所の賑ふる方を漫筆  
志けずり石里に至るを請ひて歸りし  
秋の懐かしき月情ありて感懐の意  
胎を免り秋骨の懐村のさる他の人々  
も然りて端書を書き就眠すは上  
時の次あるへ也。

六日金曜日晴

朝九時坂下校に出で辞令書書の要す日を書  
く於時坂下校に登りて諸氏を見る光はあ  
何れしもさる午後は世来福永小  
出畑等の諸氏を訪ふ若田氏をば甲之例



語りあり一夜は新編にて平紙を書きたる  
眠り一時は時過す者ありと志  
七日土曜日晴夜雨降る

朝は霧のりありてまよふある書きたる物取り  
院付ありて一時は時過す者ありと志  
四百分を要す取る百三十三と銀のりよりぬ換  
めし金を車ふる入るる於二時迄の汽車の乗り  
降られたれば午後四時西の車に乗りあがり  
決す今井氏を伴ひ左の江に定條氏を伴ふ  
めしを後する氏は江にをぬるといへり言の  
ありとてちよとてあ、列車は風を帯びて出の  
野原の面より野原を川へ降り野州急ぎし  
道が川津を越へて急がしむる夕照の

瀬内の鏡橋を渡る湖山の翠色し我子せまる  
ぬれく西来舟はなる長橋はなるもり此む  
りの湖日ありありとまありささあり  
大地の舟を横めりて、洋々たる湘湖の舟あり  
の舟もつら車は車轉然もも舟は山のと  
二子んを抜ける随分般見景あり、湖の情れを  
世はまら此のぬく手取り早く轉つるる心あ  
と心の内におい、大なるをあげ山科の  
舟も舟をいとおぼろげあり、由らまむいのお  
つかりまら此の舟車は此舟のりは早し何程  
あり舟も同し人なり山科舟のりは里山と  
呼びこるるも思ひ止まりなり、月また



出ぬ夕陽のまきまき安の都を去せぬける  
白の山崎のわちい、秋を恨むる鈴虫は流  
いささかて雨の月やうう出づる舟の  
東の山の端の豊取雨は黄余るこ際付けたる  
やうな輝きたり、銀輪のやうなさし登りたま  
野陸の秋色いと深きなりわらわれぬ  
淀河の霧の橋を渡るほど渡り火の泊り船の  
細き火光のゆるゆるををり人か夢の如き  
山々雨の音はこまればささやうある路日ある  
のこつ獨り思ふ沈むる車はやうく梅の  
のぼる此所より車を驅つて谷舟は向ふ  
根岸の舟もさむ掛行燈、橋子ののり、街  
路の光のさ、何るやうに昔のふかしの影

居るやうにある花をきりぬぐ此れは  
お出やうにお上りやすの嬉しさを手して  
きこえを流し流さむともなはは  
舟の影をゆるゆる流す志の舟は淀河の舟  
もさむ夢の如き火光のゆるゆるををり人か  
夢の如き山々雨の音はこまればささやうある  
のこつ獨り思ふ沈むる車はやうく梅の  
のぼる此所より車を驅つて谷舟は向ふ  
根岸の舟もさむ掛行燈、橋子ののり、街  
路の光のさ、何るやうに昔のふかしの影

朝は急雨風の和し来ると外出するふかしの

日々曜日晴朝雨夜晴















なまな夜の涼しき薄衣の身のあはらう  
寒くく、一ツ家の燈火も人焼くところいふ  
火のあかりのころら非の「のり」を。やのこ  
月やと東の方の山を出ぬれぬかき多花を  
下車す、今井氏を待つこの時法衣を歸當  
の途に上る、秋色に桑畑の影をみすこす  
城の白壁に月を白く見へる、宿に眠り就  
き、はたきき時を前のやせりけむ

十日大晴日晴

朝より一筋の靄一えふ、毛本におとよらぬ  
の手に紙を書き日く、言ふ外に長文ありぬ  
午後肩山より、の手に紙を書き、甘のり  
招むるころ、五時頃、相ある吉氏来る、難

七時の夜やう、此を待て、出で生を  
す、外に出る、帯巾の、紙を、買ふ、宿の  
こは日記を書き、秋の憶やう、深  
く、つらぬ、孤客の腸す、あさる、時、女  
来りけむ

拾陸日水曜日 晴午後少雨

朝の晴れ出候す、生徒等を見る、教科  
書をも借用者あり、正午退同僚の人々余の  
為の宴を、閉き、ある、とある、ま、か、を、車  
に、入、れ、酒、を、た、り、す、を、食、ひ、且、を、を  
合、を、す、。の、ま、を、と、自、を、あ、る、人、を、隨、を、を  
の、打、解、す、お、酌、の、女、を、を、相、平、を、駱、を、を、







東の志のふたの氣心しきまそ是非あり。方々夜  
れたれば、激志く讀書するの勇力氣あふまなりぬ  
志のあはれと。此れも慣るれば老迄のふはるる  
るべ志と思ふあり。人世の事、總て一奮進  
あり。我は是非其の何のふたそ、其の  
名をささぐらるるを得ず。命はくは今後  
大に奮進ありはむ。

拾冬日金曜日朝が雨午後晴

朝七時頃雨を日出一と出候す。待りおと三時  
頃一二年級甲組の講義を教へ三年級の毎日  
語作文をも教ふるなり。中々興味深なり。き  
書道、芥橋十三所目の必をい、相氏の定ると書名は  
を御覧せらる。晩方松尾氏を訪ひ相方の平町の志を

見、東新町を經て今井氏を訪ひ又歸途、東  
新町の宿屋及び茶屋の定ぬを見る。先づ此の  
三軒都合よりおぬ志の定ぬは別あり。そのも  
ろくお聞を見て時を尋らせり。朝の内は秋の  
の書名の接あり。在東よりへ向けて端書を  
出す。河原町の紅屋へ行き洋紙調造を命ず  
給ぬの事いとむあり。秋の懐やうく深く  
あり行のむとす。そのがぬ志、随分度たりを感  
ずるものなれば、餘程注意をせぬと自分の  
勉強ほそどのけるあり。その、鬼の角  
持は大に奮進せざる。可らざるあり。此の乾  
燥のたる、職書あり。は老いせりものたるべし。身  
体弱きなりと我がぬき、精神の堅くするたと我がぬ



きり刀子は、知れずく、頼情ふる習慣の隙に  
まゝなるは、此のとおろ、あは志たに、証言のせす  
る可らざるものなり

拾四日 土曜 日晴

朝は興学校へ出づるあつ、別れの如き、歸宿後午後二  
時迄より、先田進業を訪問して、話す、栗田  
氏を訪問す、先田は下老、武平公卿を承知し、不  
晩方定ぬるを、牛肉を令とす、中々、七日のりき、先田氏  
来りて、少話の後去りぬ、夜は別みあす、るも、  
乞眠りぬ

拾五日 日曜 日晴

朝九時迄、鹿子木氏の定歩を探、さす、見當りす、  
切通末を及ぼるもの、如きおまの、面白志、漂然とす

坂を下れば、彼方、一簇の村あり、此の入れは、真  
居奉といふあり、未原まが、僅め、三十五町、餘り  
過ぎ、すといふあり、行きて、見むとの、如き、心と、馳れ  
て、松林、青圃の目を、捉けん、まゝあり、るある、時、日  
餘程、早よりければ、其辺を、ふらり、す、於二時、三つ、頃  
の汽車を、待ち、合せ、中、等、の、切、付、を、奮、奮、発、志、を  
言、ち、振、へ、歸、る、午、食、後、は、天、寧、寺、と、い、ふ、る、わ、た、り  
五百、四、難、謹、の、像、を、見、ん、都、屋、を、仕、留、る、る、を、行  
持、の、徒、に、し、断、け、ら、る、す、く、き、を、折、り、て、歸、宿、の、日  
す、湖、島、の、類、を、美、た、り、す、市、中、を、散、歩、す、  
芹、河、の、橋、を、渡、り、し、幡、道、の、る、ま、で、ひ、き、見、る  
拾六日 月曜 日晴  
朝は、興、校、へ、ち、く、る、例、の、如、志、授、業、する、る、を、濟



みち歸宿兼書食後鹿子木氏を訪問し大い  
相訪り中組へつたり或家を見たり雨  
鹿子木氏を訪問し晩に至るまで大に談ず  
歸宿後は別りあすも亦くそ夜を甚し  
ぬ。秋、懐いと深の志

拾七日火曜日晴

朝は存校へ出る列の如き、学校の十使供  
はれと芹新所の八田といふ家の敷屋を見  
まの地らへて居れば居るる所なるべし  
着方鹿子木君訪問の事ある。昨日の之は  
値さねと今軒貸賃す、うかひのある。見れ  
は安未肉すべしと云はれぬ、夜九時頃栗  
氏来るる。さまじくたるる。つらき流しこ去る

拾八日水曜日晴

此日は朝文字校へ行く。おと列の如き。午後  
は鹿子木君を訪問し相訪り中組の之を  
をり入る。餘り廣くもなし。歸宿後は  
別りあすも亦くそ日を送る。ぬ夜は下  
讀く。あつと云ふ事。

拾九日本曜日晴

朝は存校へ行く。午後兼書食後鹿子木氏を  
訪問し芹新所の八田といふ家の敷屋を見  
よの芹物を取らる。此を用く。見の  
外に有用なるものあり。大に困りたり。  
夜は始りての病。心持て着有るぬ。あ  
の眠り入りぬ。



















恨み流びたるやうの身へ初めより筋路の心  
あいのあつたと思へば、半夜自覚を振寝の徳心  
と評す。

廿五日水曜日晴

此日校舎のより果てな後、洋服屋は洋服を  
持ちまわし、贈子の世勤なり。晩方福永氏  
を訪ひし。洋服店に贈の天衣友をいせし  
外、紅屋子に贈の服も贈す可し  
をわし。夜は下宿方の時を暮らす

廿六日本曜日晴

此日も校舎のより果てな後、山の方まで  
散策す。海岸に遊馬はあり  
佳なり。夜は読書の時を暮らす

廿七日金曜日晴

此日やうく洋服出来上りなり。只空然  
と考て日を空つり。此のうら有物とは何  
ものなるや。此の書物は、

廿八日土曜日晴

此日は校舎のより果てな後、洋服屋は洋服を  
持ちまわし、贈子の世勤なり。晩方福永氏  
を訪ひし。洋服店に贈の天衣友をいせし  
外、紅屋子に贈の服も贈す可し  
をわし。夜は下宿方の時を暮らす

廿九日水曜日晴

此日も校舎のより果てな後、山の方まで  
散策す。海岸に遊馬はあり  
佳なり。夜は読書の時を暮らす



等事り有りぬ、文藝傳集の巻にはこの  
赤の面白きやうありし、天木の千代末  
り、お栗の千代盛なる、良なるの、  
出で、松原の村を過ぎ、張の山が、  
池をすげし、自白の夜涼の輝け散る、  
舟は良ぶ、秋、津島此の生む、  
あるかぬ、北の山、翠年、  
生身は此の、舟角なる、  
舟の突出せる、前舟の、  
かたる、只、  
行く、  
さぶたる、  
る、  
色と、  
雅、  
なる、  
を、

たり、此より道、  
あ、す、  
あ、  
さ、  
く、  
ら、  
の、  
陸、  
ら、  
枝、  
浦、  
り、







拾月一日 大曜日 雨

此日は文字校の出るおと例の如志但者今  
日よりは午後三時過ぎまであるおとみあれり  
三時過ぎより畑氏の結婚の祝言女子連らある  
我獨大子騒ぐ、獨身覚の氣炎あしく、  
強のり手、嫁御を見る、お桐の人あやう  
ありあされど尤迄美人にはあざむる可如者  
而を衝いて歸家せしは九時頃あり去あ  
む、人世妻ふくし、負あるは顔ある可い浪  
あるものあるべし

二日水曜日 晴

本夜夜を佐野氏より波大さといふるをき  
て、放譯後鹿子木君と相携えて、波止場へ

至り、西北の風湖波をききし時、あはれ白雲  
砂濱の碎け、鞆塔たる御堂はらう。海は  
上を越行する、碧波、波のくときし、一波は波  
を追ひ、等せしは、碎け、散る、  
は我等の面を打せし、快云、あはれ、  
をきげと、波を見れば、届り、と、  
す、波の、白雲  
青浪の中、散る、  
並、あはれ、かある、  
星、あはれ、白雲、  
色、あはれ、  
は相、あはれ、  
さま、あはれ、















いさよりぬ 横雲遠く 膽吹の山 峰は ぼろけみ  
山影や 暮明の あり 暮れり ぞの あり あり  
も 頼まじ 膽吹山 といは ぬ けし うれ け ち ち ち  
た月 あり あり ければ 先も あり あり あり あり あり  
肌子 滑り あり あり 清澄の 光 四圍 あり あり  
月光の 佳 あり あり 良夜の 静 あり あり あり あり  
さまの 空 相 志 を 肆 あり あり 明 光 千里 此 因  
た月 の 對 して 我 老 の 志 父母 は ぬ 何 あり あり  
人 を 中 あり あり する 人 生 の 幸 福 あり あり あり あり  
つ こと 言 あり あり ち 地 の 解 釋 あり あり あり あり あり  
は 都 路 の 傳 あり あり あり あり あり あり あり あり あり  
お あり あり の 我 は あり あり あり あり あり あり あり あり  
へ 難 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

き、低個俯仰之を久あ。

名 日 月 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり  
蒼 蠅 の 群 の あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり  
志 が 遠 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり  
放 する あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり  
す あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり  
ら 春 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり  
月 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり  
此 夕 鐘 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり  
所 入 出 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり  
屋 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり  
午後 十 時 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり  
四 日 金 曜 日 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり



此朝は出校するはと例の外未、明日の三時か  
まぐ怪あければ、一由あればはどのすへき由を江  
口氏まで申送る。家々歸しははるのす、あの特考の  
舞の下讀ぶとまをさし、たるのす、殊珍のさる  
のさるあるを聞きこし、さるのす、たるのす、相考の  
肆のさる

旅子宿て夜す、聞きこし、さるのす、たるのす、

五日土曜日晴

朝は考校へ出り、午後歸宿すれば、江口の此岸  
後六時の子都へ着す、可きよしの電報未  
り居たり、ちの喜びて直ちの車庫へ行く  
服装は考校の制服なり、張三本、四の徒  
と伍あて、湖畔の風景色の面白きをも見、比叡

比叡の清徳の是散然たる次めたるを眺めて、大津  
ありぎ、逢坂山の隘道をも、遂に京家へ着せし  
は三時、あすの、其か、七條の南を、早れ志  
橋より、さるの、北の方の山、あを、さるの、温和  
さるの、靜然たる、足先を、貴志、行き、世三  
堂を、遠り、志、あを、折す、は、新、り、志  
新、社、と、さる、後、山、さる、の、大、橋、あり、  
い、ふ、標、示、ある、さる、若、十、條、の、石、燈、籠、を、端、ぎ、り、  
の、さる、さる、の、全、日、東、眼、下、あり、さる、の、  
ら、一、大、河、原、の、ぬ、く、屋、子、の、石、の、ぬ、く、の、思、は、れ、志、  
松、崎、の、山、原、の、方、四、明、は、の、り、の、柵、の、さる、の、  
又、さる、柵、あり、さる、の、厚、松、林、群、れ、さる、の、志、  
あり、さる、なり、此、れ、さる、の、英、推、進、の、志、







二人共々空獲なるる甚らみを又びて泡盛の  
とうめり出でぬ。免角のたまなる見二人  
の半見のまのたあつては相済まざる地獄の  
と定條氏月下の短歌を指して直に起さる  
生亀とつ料理屋をわらうく探りて見  
まの怒らし中料理を今にひ鯨のま身子  
もありつ中一陶の酒を酔ひしち子天流き  
此をし宿をきくしての宿屋の山城屋といふ  
宿る。中々ハニ可麗ある宿なり。湯に入る  
湯浴槽の神聖あり。裸のまきまのころ  
之を久うす。上りては相共の白池の流る  
て三條の湯より出る月景のあつては定  
條氏自鼻孔カ先を起して、るまのまの

評

る屋る、月を討ちて橋を渡りてちる多  
の美し海を渡る。江氏は歌のあつて女  
の過難くして海なる風地を渡るすとい  
ふ。思ふ事世にあらん。有るのたみはあ  
ある。まの用心深くして女人の容姿の  
をまのまの自も快く此を云ひ出さ得べく。今  
敢て之をば怪まざる。此あるこのま。於時  
就藤、定條氏敷寝志たれども余は痛  
のめり気まきり。さるる。眠るを待たし  
と現とつあのみさまよひてうらふくと夜を  
送りぬ。

六日々羽睡日快晴  
朝七時宿を去る三條通を越え同及の江氏は



朝野の間に... 走き出で... 栗山の... 行人の... 月夜... 照り... あり... 夫... イト... の... は...

大陽を... 折衷... 其の... 同... 力を... ぬ... 比... 二... 嬉... 山は... 赤...

住... 何... 昨日... 大... 一... 道... の... 評...

肝膽

正徳



金院寺のすへ急ぐ道々江氏が要の口を可  
らずといふ言見を或人のせらぬ由を強むる  
素人のに要る事いふにたふさおど後うあひら  
四山の沈静なるをいしは君のたふさの  
など詩あるに院苑寺即ち金院寺の在る  
す、待のちと尋時田前野郎子の用あり古  
なる庄園をきりし金院寺の池及び  
び古松のたふさのまはいと面白きと見え  
案内なるをきりし何の轉りるを聞きし  
古松にもある事一庭先をきりし事り  
赤松の百をいし事一庭先へ行くに室物  
ののち一の本をいぬ金院寺の足踏の  
たの事す一の本をいぬ我心をいし事一

を得て離宮と月志社とのをいし  
とし下加者。社の古松あるを釋者、古松の  
社をも一見者、第三高等各校の傍を過り黒  
谷の寺の山門はあはれみたる事あり  
それより南禅寺の傍の報直了りて書  
をたす。料理類あるよろき中々気取らるる  
あり。此所よりは南禅寺をいし事一  
をいし。円山公園へ出でしに  
社畔の眞の山屋に入る。表は相離なる者  
も重なる。眞の山屋はほりけりてあり  
の壁土破をいし事一破子の明り  
もあつた。色あせる所々灰色の班点ある  
窓掛。それさるるあり。庭土の地あり。板の



髪はうまげりし江  
民方子安あこ百  
我れき日髪をば  
若なる時日髪を  
此日心三を横切  
と事し果たさす  
と屋たき世を  
らん世の末の  
此をいこ如く本  
此日はあつた  
此日はあつた  
此日はあつた  
此日はあつた  
此日はあつた  
此日はあつた  
此日はあつた  
此日はあつた  
此日はあつた  
此日はあつた

申程のまは二戸をまじのふすし此より下の土  
下へきき、包にたのりのたのり蓋者何のをり上  
げるあめめめむの、ふく氏余のたのりやせい  
あに、然ちる、テ、ン、ケ、ン、ス、ハ、我、中、の、光、目、あ、ありと  
余思は、一、手、を、拍、ち、て、其、の、高、評、さ、る、も、評、す  
傳、影、も、終、り、て、此、評、を、あ、て、つ、清、い、れ、き、ま、一、向、い  
定、修、氏、志、き、り、の、他、の、う、め、の、怪、一、ま、り、し、を、笑、い  
清、い、の、舞、台、を、あ、き、り、の、前、の、サ、サ、に、屋、の、お、相、あ、り  
茶、院、屋、の、間、を、下、り、た、ん、を、坐、り、廣、く、す、す、の、大  
佛、の、相、野、さ、る、を、笑、い、い、江、の、氏、と、相、あ、り、い、れ  
い、ま、あ、時、の、歴、史、を、く、り、こ、の、い、ま、あ、り、我、に、い、れ  
の、精、神、た、る、の、定、修、氏、を、終、身、の、す、す、午、後  
五、時、前、友、と、七、條、の、江、事、集、の、こ、東、あ、り、相、

此日はあつた  
此日はあつた  
此日はあつた  
此日はあつた  
此日はあつた  
此日はあつた  
此日はあつた  
此日はあつた  
此日はあつた  
此日はあつた  
此日はあつた  
此日はあつた  
此日はあつた  
此日はあつた  
此日はあつた  
此日はあつた  
此日はあつた  
此日はあつた  
此日はあつた  
此日はあつた  
此日はあつた

別れ秋の夕暮の降忍の目を眺め、大津は  
そのあき瀬内粟津をわたりて、又岡の降  
州に降りて、正しぬげん七時をねらまぬす、  
名月東山の院のりりて、このあき、ま、ま、の  
言を、このあき、ま、ま、の、あ、ま、り、て、野、の、白、水、の、湯  
を、浴、び、ひ、の、九、時、の、眠、り、を、た、ま、い、ぬ  
す、の、月、の、降、り、の、時、也  
朝は、あ、ま、の、校、に、い、ま、い、ぬ、夜、は、吉、田、種、並、氏、来  
り、て、種、々、雑、談、の、後、去、り、院、に、い、ぬ、秋、の、景  
色、や、う、く、深、く、さ、る、ま、あ、り、ぬ、我、は、旅、の、宿  
の、懐、を、い、何、の、い、て、や、る、あ、ま、い、の、  
日、火、曜、日、夜、雨  
朝は、出、校、す、る、の、例、の、如、き、四、時、の、あ、ま、い、は、い







学校より歸りて後別りて寺よりのもちくらの  
身軽にたなと乱雑にす。晩方福永を  
ひまきする。相推りてさへてせり川を越へ高宮道  
のまき行きて夕陽の當面たる歸まのまきする  
さまを眺め急まきあて河原の出て牛馬を賣  
ひまきするをふは夜は明日開きありの準備  
せしはありのまき。

十三日土曜日晴

此月朝は六時三刻に起き出でたり。古き洋服を  
着て寺の草鞋脚絆を履  
けの要り書を堅の破宿を走り出ると其後  
一直線に鹿子木居が宿を叩き七時の  
瓦焼町を出る。坂道を端が宿りては

る

黄落た郊外。春々たる如く山をさすのめ行く  
手の山々。朝日怪き山をさすのめ行く  
り千舟の溪壑。傾斜するぶきききりては  
おいて厚く甲斐文の山。日色もあくやふ  
と相推りて、島居幸の村より出づる一條の  
路は黄はゆる。稲田のらも。登りて屈曲面白  
く近き。草履屋のりをめぐる。亭松青山の眺  
景をみる。楳ま。鉄を肩する曲ひまき。等まは  
たしく。田中。あるまのめき。越あまき。路傍  
の瘦松二三株並らびて山則。を指す。垂土の色  
びたる。屋ある田舎の二三。我のせまる。かく  
を渡りて。鳥居の村を。行きぬけ。赤木  
らた。木之の。の。路を。登れば。柳。赤木。



翠巖の映るる雲をよせし、磨鏡の山嶺あり、山松の  
下はまきして眺むれば、月庭の清相の風まきの  
くや、空あかりさく晴れたれば、白帆の行  
きのい、青山のたつたまある、只行客をよして悦  
びて眺めつらきものなる。

湖波遠く青山を洗きて秋高き  
鳥の海の秋面白き峠一の子

嶺を下ればいと秋の草屋の山に浴びて屈曲する  
すきあり、路傍の秋風みまき、木立ありや  
やをまりわく、この姿をあらはす、霞のまき  
まきく、月光の画者の祥雲を裁む、前山  
馬の足早、山骨をのり、曲曲をまき、さき  
のり一條の行路ある、このと、疑はる、他なる。

葉鳥の旅人をよせせば、何とよき旅の  
つたる、秋ありき

あの山の旅人あはせは、や秋の晴

路傍の松持枝面白く繁く、合ひたる、幽  
の巫路を踏むでは、このやうなる、白  
の美人をよせせば、やあはれ、つたる、  
やうやく、番場の宿驛に逢ふ、行旅の  
客いよまれあれば、あはれ、草屋の  
あり、板のめり、見る、  
中道に候、公の行旅相違、此軍の  
まよひ、昔の笠のあはれ、  
卯のまよひ、あはれ、  
ゆふもたつ、と、秋



のらゝ思ひ生可せてはなれと「まほ深き心地ぞあ  
る。

秋風や破れま宿の垣のみ  
柿の葉傾ぶく家の軒すのく  
行くあと 數十ま、古色面白き草屋の又草園  
のふのふ立せるま、時は一りの日陰くらく屋  
上をそめび、濃福のるしをのま、十百向き車山  
は其の従まらぬま、四圍の家居の古稚  
す可き加へて所はられのたはは其の百より  
さし出たり、庭のま氏大子喜むて手帳の  
中み世を厚する、余は破れまを地まのりも  
四圍の秋のけしきをまのむ。

秋風や破れま垣の豆の花

くらのる石垣の鳴く蟋蟀

破れ行く籬のくつてみ架の青

過ぎままの青の破屋のまのめ又控え難  
あざいありけり。中仙道の趣深くあれる松  
をぬけて丹金のの松をなるほど、前面を  
れば、膽吹の巨嶽は聳然とあし、晴空のさ  
近き丘、遠き林の配合いとをのま、ま  
越え方の連山は一むらぎる松林の結  
る還身する慌も近き世草屋を踏ま  
のぬま。

孤村秋のま、ままのま、まのま、まのま  
秋風の膽吹を越えて野は蒼なり







ある所を美濃信江の国境宿務物産の里の  
ふせ、信江の里の雅なり。美濃の里は山  
あり、壁の石破屋あるのみ、小丘、  
①後をめぐりて、稲まら屋を田む、思ふ秋  
深ありて、月色凄快、草木凋落するの夕、  
まくら子懸坪の音ののれ、くを聞く時、  
ある所の秋のこのはより、  
夜もすがら二國の秋を待たはむ

宿務物産は秋の里なり美濃信江

山中の村は野の路をなす、  
流るるあり、十奥むれ、  
れば生みそをも、  
中流のせ流る、わくと、  
涼々たる、

はま、志き、里の秋の、  
滝あるを、  
のれ、  
峯の、  
二股の、  
り、  
ま、  
ふ、  
中、  
免、  
し、

秋ふけて名も知らぬ滝の、



滝の音の秋多き里子御着きけり、

滝の音の秋多き里子御着きけり

鹿子木氏の杖と余の杖とを伝せし流の中よりふ  
きく泥亀をばさみ出す放すたれども鳥を走り  
去るもせまはばたきまのぶと志。此所をも出さ  
地々たる道を踏みつゝ此の滝は山中の滝といふ  
あるの不破の滝といふもある。鹿子木氏より  
へは、氏突如として曰く馬鹿の滝は如何と余  
は其の意思を解す。能はず。氏突如といふは  
さやや、君は馬りして余は鹿也とあるはあ  
あやも、相考す。然たり。今須人の所を過ぎ、  
藤下の村サカをすぎに關川の流の仔細を  
越るに松尾の村のなる、不破の古南の跡は

右方坂路のみまりのあるあり、数頃の家地布立少  
暗き所、けまの石文たてり。薄ありし厚花  
白の秋風のちびくも、行つた長をりん地せり  
れ本のりりり、素すい流す村落青邱の地也  
るもをあらき地せりき。

古南跡あれは秋風旅の袖を吹く

兼原子着せしは午後三時の頃すの者、長岡を渡  
らむと町を村媼子内へとも要道を得た、一  
る古南の秋のうらみさまよふも亦一軒ありあ  
と思ひ定め、鏡原路の上を登りて山頂の里  
静なる秋野の景色を告りし、路停の小池のた  
わの松瘦せして古苔の痕面白く山辺をむす







めあすしるのもおくし 残照のまをきくくく空  
之然として夜を笑る。

茶の虫の 蝶もあつて秋を怨む

於五日大曜日雨

いとさびしうアキ、雨の音虫のまをきくくく空  
旅路の秋懐いと深のアキ、都もある人々あつて  
この父やつら母やつらあやつらあやつらあやつら  
哀れあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
此の秋をいつのやも送る北辺あつてあつてあつてあつて  
此の秋の宿屋あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
心沈みあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
るくも甲斐文あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

思ひ侘び雅集の夢の悲きは

旅宿の

都もこのくや秋の夜のあめ。

父母の寝覚思や秋の雨

うき人は秋の雨をやせけんむ

於六日本曜日晴

朝は文を授るあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
方栗田あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
卒といふ生徒を伴つてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
庵まくまてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

於七日本曜日晴

此日は朝一時福永氏を訪ひ相携えて大洞  
の向多道とて世本を行達ふ、大洞の茶屋には  
諸氏既あり、庵子木氏を若くは船子屋を  
て、中江みおら一画景をそのまの眺に悦ぶ



て自然の千や一も入る。松下子鉤する女の  
帯赤きも面白き。蘆秋水際のはげりたる  
あこのよりをり。鳴鳥もかれ陣やも聞  
白志。

昔蘆高く鳴の浮葉を葎りけり

秋の江に釣する人の帯あこの志  
相まき登る松原の村。延蛇たる磯の丘陵。悠た  
る江波を抱きも。静。幽の三思きはまき  
の似たり。松山の下をめぐりん物生山の  
村の出で。松を平の志。松山は登るお  
松茸。松根のつらき。あてて。我等の採  
るのまのせたる。いと面白き。他方へ走  
る。子一のけりん。松のあまのまのひる。松

み

り集めて生る。登り。遠く中仙道の連山を  
む近く。黄。湖。海。の。相。封。せ。る。ま。の。を。撮  
下。あ。途。の。吹。の。諸。山。を。仰。ぎ。し。舟。を。着。心。  
茸を割いし。大。の。食。か。を。す。さ。の。山。の。淡  
まけがりの。之。を。登。る。は。これ。も。茸。や。く。人。の。ま。れ  
は。あ。る。と。志。隣。の。松。間。の。茸。を。ま。さ。る。か。女。等。の  
帯。赤。く。ほ。の。ん。も。も。此。方。赤。茸。取。中。の  
江。一。点。と。帯。い。ふ。こ。の。の。ま。の。の。

茸まさる女。袖の重き赤志

秋晴れて茸やくけありとあろぐ  
あ。の。山。も。茸。狩。あ。る。の。飛。の。志。  
茸狩や湖水の見ゆる。松。ま。で。  
松林のらもさまの。い。る。通。り。も。湖。見。る。あ。ま。の。ひ。る。志。







路停の横橋の葉も秋風も黄葉するさよふいと  
哀れある遠山村落の夕やいと秋の懐  
きししまさきめたり夜は別なまきさよふと  
て休みぬ。

廿一日 晴

朝露の露を帯びて、日いらくこのり、山を青く見  
て雲のりり霞を帯びて、民の宿をばあなる多かりたけ  
り、雨をたれ方おく、晴路をたどりし大洞のりき  
糸光堂を登る、堂宇はふる古雅なり、湖  
景いとく、面白き、歸途、麓の中より、鳥  
鳥の音のりるを聞く、古城を登りし、湖景  
をみる、空晴れば、青山、土湖の秋色、  
いとまざる、このり、眺められ、志、山をたどり、宿、

至國を登る、眺  
望、と、遠、深、き

急ぎて、食るを、ある、雨、片、橋を、越、る、西、行、す  
佐和山の徳方の、伴、ある、伊、吹の、姿、いと、面白く  
荒神山の、御、野、田、を、の、さ、ま、ま、眺、む、る  
も、足、れ、り、道、停、の、首、下、中、は、賑、々、と、少、時  
も、も、昔、の、堤、を、あ、り、と、歸、宿、に、ぬ。

廿一日 月 晴

朝露を、衣、子、出、る、さ、よ、ふ、と、別、の、秋、も、歸、宿、は、別  
な、ま、き、さ、よ、ふ、と、秋、の、懐、は、いと、深、く、ま  
り、ま、ぬ、雞、頭、の、いと、ま、き、さ、よ、ふ、と、早、の、ま、ま  
の、よ、の、ま、ま、さ、よ、ふ、と、何、と、ま、き、さ、よ、ふ、と、け、あ、る、や、う  
な、も、ま、き、さ、よ、ふ、と、秋、の、衣、は、ま、ま、さ、よ、ふ、と

廿一日 大 晴

冬、桜、も、久、き、と、成、高、の、逢、ひ、か、ま、く、高、知、の、野、を











流るるを見、石山寺より着きしは九時少し過ぎ、  
志願ありきありし堂宇の内陣を見、源氏の同  
人入道出で月見堂の傍の檜架の榎の樹  
の傍の徳才胡波瀾湖をたつて七良一や峯嶽先々さ  
まの兒乃の山三上も近く指割のちのあり、東舟  
の老翁おののく、自向、見たり、村娘  
田漢と傳えて、三入、や、流を、瀬田の川を瀬、  
梅を踏り、大津、は、湖上の、見、は、東舟あり、石  
少の方の景頗る佳あり、皆、末直、と、不  
西洋料理屋、を、書、合、等、の、服、は、の、と  
不、議、議、陸、の、る、の、如、き、下、牌、の、顔、色、と、可、采  
あり、村、娘、の、親、戚、村、上、氏、を、訪、じ、三、時、過  
三、入、五、度、さ、て、照、り、始、め、去、斜、陽、の、光、を、流、し、

心、唐、崎、の、方、へ、急、ぐ、比、叡、の、大、嶽、は、近、く、頭、上、の、舟  
及、比、良、の、舟、を、遠、く、去、り、青、舟、たり、栗、瀬、たる、湖  
波、を、越、え、て、近、く、三、上、の、山、園、を、嶋、山、が、あり、右、に、龍  
れ、て、荒、神、山、鳥、は、く、く、見、ん、也、佳、景、人、を、あ、て  
況、ち、去、む、る、足、る、や、う、と、り、一、麓、の、向、を、尋、る、し  
麓、の、音、を、ま、る、ろ、く、圃、向、を、嘆、く、藍、の、花、の、赤  
ま、ご、お、の、一、つ、り、地、々、たる、田、舎、道、を、行、く、余、は  
凡、そ、里、存、餘、車、も、逢、ひ、人、も、逢、ひ、四、時、過、り、  
松、の、ま、る、る、所、を、逢、ひ、得、た、り、一、麓、の、音、を、尋、る、し  
を、の、ま、る、く、梅、を、み、せる、老、松、は、龍、の、如、く、踏、ま、り  
蛇、の、如、く、う、ね、り、も、幹、より、松、同、幹、の、巨、を、向、ま  
て、其、枝、を、き、老、近、べ、たり、一、新、の、鏡、を、出、さ、れ、た  
る、也、**盤**の、端、を、出、れば、柳、克、一、頃、比、良



の蒼嶽に映る神崎雪の山は遠く田舎  
の如き水の方より連なり、東南の方には此處に  
山は多し、山は蛇行して、まゝ峰は山を擁する  
早頃、雲のくる夕陽の影を深めて、四目まを  
も佳なり、唐崎の松の影はあちで、田圃の月  
光の方と美あり、思はるるあり、みづ小後  
舟の乗る大津一歸り、三井寺の夜多し  
月白く、湖波開き、風情をまごの、雨村に  
氏の宅を、おの晩寝を、寝るさむ、七時前  
静かして、雨相の如し、月光を借りて、急  
来り、馬場、傳車、物より、た、車中、の、指す  
寒きまゝと、外、高き、詩、歌、を、吟、詠、す  
つては、身を、勤、る、者、を、あ、て、午、後、二、時、五、十分、の

頃、考、根、の、善、自、し、ぬ、疲、れ、た、れ、は、直、す、こ  
床、の、八、り、ぬ。

廿九日 晴  
此日は冬、校、子、出、る、ま、と、例、の、如、し、歸、途、生、徒、至  
者、の、詩、を、討、ひ、て、治、序、を、ま、り、今、并、氏、事、り、し  
へ、ス、ケ、ス、傳、を、讀、む、烟、の、あり、之、を、守、り、  
を、者、ん、て、之、を、食、し、ぬ、夜、は、僅、か、下、讀、を、ま、ら、た  
る、のみ、を、空、想、を、肆、か、ぬ、秋、深、く、し、  
虫、の、音、も、と、そ、る、あり、都、路、の、父、母、や、如、何  
女、や、い、の、み、獨、廣、き、寒、き、部、屋、を、眠、る  
身、は、何、と、お、く、悲、思、の、肌、を、さ、ま、る、の、心、也  
志、大、く、し、  
廿九日 火曜 日 晴



を救ひ出さる例の外は、歸途、笛の治癒を思ふ、  
下讀をすしして後、今日京都より来ることを、  
直々の面白げなるを、おし、東より一玉りぬ  
高の木式を、おの相携りして、河原所へ来り  
三上、屋の、のり、の、わを、意、再、を、命、者、能、心  
を、命、者、不、倒、氏、者、笑、交、す、此、所、は、果  
々、幸、と、は、幸、ひ、し、諸、り、下、び、た、る、所、者、も  
思、は、れ、ぬ、歸、途、者、は、刀、報、報、を、遠、す、  
之、藝、俱、樂、部、を、見、就、眠、す、は、於、時、過、不  
可、也、

世日水曜日雨

又、校へ出るる前、所りの書の手接し、眉山一  
葉二子の文、あ、の、く、く、面白、也、秋、骨、子、を、激

志居るの、あ、志、進、医、者、の、午、へ、行、き、し、は、四、時、前  
より、志、歸、途、牛、肉、を、買、ひ、見、合、を、四、見、ひ、たり、  
道、場、の、一、浴、者、後、は、下、讀、を、お、は、志、の、り、者、  
志、の、き、り、一、雨、を、思、ひ、た、へ、く、く、ま、あ、る、都、  
志、の、り、や、お、あ、る、あ、か、い、早、く、於、二、月、ま、よ、の  
あ、ど、く、し、あ、い、空、想、へ、る、ふ、け、り、し、時、を、轉、す、大  
を、便、ふ、け、れ

世日本曜日晴

此、校、中、出、る、る、例、の、如、志、感、冒、の、氣、味、を、頭、重、く、し、  
苦、み、す、三、時、所、り、余、并、氏、事、の、れ、ぬ、氏、の、あ、の、り、  
ク、を、傳、を、講、ず、薄、暮、河、原、所、を、あ、て、く、大、美、聖、を、傳、  
高、足、か、秋、風、折、雁、晚、秋、の、言、と、深、き、自、身、の  
は、病、あり、孤、極、を、や、う、や、く、良、た、く、む、と、す



る。虫音轉らうらみのほあるも悲恋く、ある時、  
京都の音の意おゆるくも是非ありや、於三月廿日  
道は早き月半程のゆり道なり、要する人々  
を見暖るき家庭の元旦を慶むべき時は早まる  
べとされど一季の成す無き暮れ行年をうらみお  
らぬのは、

此のころや秋老んてん秋はわく

十月吉日 金曜日 晴

朝は暹子校へ行く例の如き、午後は觀音の講義  
終る後、上野及び橋本を連ね、濱田佐野二氏  
おホートと酒をうし、琵琶湖上を浮ぶ、下流の波  
々々、七風等の如く比良の高山等は青く、荒神  
山は近く、沖島も見える、鳥の鳴きは昔の如く

1061

の池は澄み渡る。松原の山に坐するは、とく、雲を出  
でたる、只、屏風をば、の侍景よさる。

秋の志、近江の湖も白帆の如く

秋の日、比良の島の青い山

佐野氏大腕力、おの腕を拵え、おの腕を拵え、おの腕を拵え

お、日やうく、西のふた、おの腕を拵え、おの腕を拵え、おの腕を拵え

比良の山、秋の日は、おの腕を拵え、おの腕を拵え、おの腕を拵え

鳩の海、おの腕を拵え、おの腕を拵え、おの腕を拵え

行くと秋の日の色、おの腕を拵え、おの腕を拵え、おの腕を拵え

船入江の、おの腕を拵え、おの腕を拵え、おの腕を拵え

秋晴や、おの腕を拵え、おの腕を拵え、おの腕を拵え



秋の江の川女子船遊びのたぐ  
 蘆生ひちけりたる入江まきまよ〜おぎめぐ  
 り或時は小奥を細する漢夫の船を近く漕ぎ  
 寄せ或時は地取つたのへしあはるん子船をや  
 びとせし〜後四時油のりありけむや〜  
 各校まで歸りまゝく運動場を出て準備の校  
 子を見せ出氏と相共の歸途に就きぬや外には  
 車系より前物有者居りたり洋服は終り  
 志の〜よき者ののみけたり志者言ふべきの  
 不夜は別よきするの事おしく九時頃人皆静る  
 就きぬ  
 二日土曜日時夜曇  
 時過出校生徒等は早べースホーンの中取り括

り居りたり、松時便り競走其他の競走  
 始まりぬ健鬼の三々五々技を戦はまの  
 能を争するなど一面白志者多くは  
 競走あり志宮内鶴州極に玉此二田友  
 大など且車もよく目まきし志ありたり志  
 晩近くありん余も亦橋り人常氏と伍志  
 競走を成む志るものは今井氏をけはめ  
 田友田松尾吉内佐野の諸氏志る志者志  
 で見られど年々来安志の志流は居の志  
 志し〜全く無恥あら志めたる志る志  
 柱は志は志者志く宮内佐野兩氏の擔ひ  
 志る志者志りし志は決志の志を志る凡  
 志十やードの志め志者志同せり



本年夏 遠征終りし後 鷹手 幾走あり  
勝利の旗は三年 北平 七久徳 降 藩 藩の辛  
落すたり 三年 北平 七久徳 降 藩 藩の辛  
生の遺恨 忘るゑや たらむ たらむ たらむ  
存は 家ありし 存れ たらむ たらむ たらむ  
たれども 止のく 眠り 難い 一の たらむ たらむ  
脳裏に たく エキサイト 老民 たらむ たらむ たらむ  
心者。

三日 三曜日 一雨

天長節 節ふれば として 一雨を 早舟 志て 出校す  
拜賀の式 在く 濟みん 於 佐野氏の 道すの 下  
の生徒 一同 軍歌を 歌ひ 今井氏の 義守の 下  
の 一同 聖す あり 一の 御寿の 下 歳す あり

るのを 祈り せし 念せし 我 日 青 國の  
万歳を 唱へ たり。 歸り 後 には 文を あり 介  
た ども 讀み あり あり 加賀之 助 あり あり 友  
文を あり あり あり あり あり あり あり あり あり  
ハキ あり あり あり あり あり あり あり あり あり  
服の あり あり あり あり あり あり あり あり あり  
また あり あり あり あり あり あり あり あり あり  
左の あり あり あり あり あり あり あり あり あり  
四日 月 晴 日 晴

本夜 あり あり あり あり あり あり あり あり あり  
ふ 交代 あり あり あり あり あり あり あり あり あり  
を 免れ あり あり あり あり あり あり あり あり あり  
中小財 あり あり あり あり あり あり あり あり あり



ライクリン。英文典を讀む。有る所から  
風の音は、いとうららのあり、一面の空を、其の  
雲を、通ちて、月の光は、野を、照らす、あや  
さし、を、みたり、其の音は、日、の、れ、  
ありて、と、ま、り、の、音、の、音、の、音、  
せ、あ、り、う、あ、る、の、音、の、音、の、音、  
を、せ、ら、る、る、あ、は、れ、の、音、の、音、  
わ、り、の、音、の、音、の、音、の、音、  
思、は、れ、の、音、の、音、の、音、の、音、  
今、は、れ、の、音、の、音、の、音、の、音、  
ある、音、の、音、の、音、の、音、の、音、  
を、ば、妙、何、の、音、の、音、の、音、  
を、な、れ、の、音、の、音、の、音、の、音、  
我、は、老、親、す、

我は心の、を、  
五日火曜日晴夜雨

を、校、子、出、る、を、例、の、如、志、一、美、女、史、の、許、へ  
郵、書、を、送、る、歸、宿、後、書、目、全、二、人、事、を、此、を、ナ  
シ、ヨ、ナ、ル、讀、本、の、第、四、を、讀、み、し、や、る、所、も、出、て、  
肉、を、甲、ま、り、て、此、を、な、ん、す、七、時、の、別、を、向、  
けて、書、を、作、る、グ、イ、ク、リ、ニ、其、を、讀、む、眼、を、  
催、す、と、甘、白、も、野、風、の、音、を、や、う、く、直、心、  
雨、の、音、は、た、ら、し、の、音、の、音、の、音、の、音、  
たり、物、非、や、し、は、す、り、の、音、の、音、の、音、  
秋、を、め、る、か、ま、の、音、の、音、の、音、の、音、  
の、音、の、音、の、音、の、音、の、音、  
物、ま、ひ、の、け、む、も、さ、ら、る、る、



室の庭ありて空想する時を至る自身は我  
あがらんと哀れある心地す。都路  
のなほれ何のうやうある存子は秋首  
は二の木の道すを思ひあてて悲しき  
多胸をや痛むるふるとの。我老親は孤燈  
のもしを哀れ折りて我歸る人乎。此の末の  
事をも折りて待たぬむらむ。眉山は  
何、子南はぬ河、藤村はぬ河、百三  
十里一片の心通せよ、徳筆すの物思ふ今  
宵の此の夜。

野方さむ歌部の友のあやのきり  
行秋の雨を友を懐か今宵存の形  
葉條々あて雨を果せぬ夜の秋

六日水曜日晴

昨夜の雨のちる書は秋宵の許へ送る家  
か歸りとはへそを伝の正體をさす。四時の過外出途  
上三年の川瀬藤池の逢ふ牛丹屋子あるうさ  
河合、滝川、直原三人まうて床のあやを見つ頗  
ぶる跡踏せし極子なりあやふさ上構上を  
い行きぬ。随分共る極まり夏あるこのまゝ  
いむと思はれて可笑あこのまゝ。夜子なり書す  
人事して評書日す。夜は静まり。夜寒の危  
やうに。加はり来てあやかぬ。病れたれど勇力を  
鼓あて西教士の舞歌を少々あやし。六川へ就  
つ。まじりたまはぬ。

七日本曜日晴







る事係たりき、梅田より下車せしは、一時過るる  
ある、曾根崎の新地をさまあひし、大坂のまじ街  
の風俗を探る。九時過車を驅つて江口氏の寓も  
訪ふ、主人公が去後れに歸り来る、春酒を傾くると  
と三益を海老のれく赤くするし、眠り就きぬ、豊川  
は明日来可きなりとの。

拾日之曜日晴

五時頃起き出、早曉定條氏と相携さへ、天満橋  
を越る、梅田の向はむき、早何所かう、職工場  
へ通る人々の来るあり、定條氏余を顧み、目く  
此あり此大都の生命機關の運轉を始めるのなり  
と又曰く、嗚呼彼等はインダストリアスなる人、  
り、見よ、此等大そ、脳の痛きとの、頭が痛る老との

云ひ、  
はあつるべからしと、余は大人此の同志、我々精  
神の方、身者、他等身、幹、坊、働、の内の報  
酬名、是、等、の差を論、し、彼等を、  
梅田の、り、き、れ、れ、とも、豊、の、は、一番、汽車、では、来、さ、る、  
者、車、を、同、ふ、あ、し、合、所、に、歸、る、九、時、頃、我、買、二、の  
靴、を、盗、ま、る、惜、め、ど、も、甲、斐、入、者、也、は、く、さ、と、僅、々、四  
五、回、一、回、凡、そ、七、八、於、も、や、り、居、る、者、居、ら、む、午、後  
獨、出、で、城、畔、を、さ、ま、よ、ふ、田、野、廣、く、連、り、し、村、落、三、二、  
矣、至、する、彼、方、の、層、々、たる、山、々、の、山、は、日、あ、ら、は、お、  
續、つ、ま、た、る、面、白、者、振、る、は、舞、の、や、あ、ら、は、お、  
群、の、り、し、ま、の、く、ろ、ろ、の、り、し、水、の、面、を、他、方、の、り、  
き、此、方、の、り、し、と、する、を、見、る、坂、を、下、り、











あり、夜ふりてはギボシの自叙傳。  
をり、夕暮のむら、慨然と、し、都の  
女の上を、思ひ、

旅の宿、女あつちのや、春の暮、  
春の月、都の女はいふ、みける  
は、夢、と、鳥の海、面、の、み、け、り、  
旅の宿、春の暮、の、声、を、遠、く、  
汽車の音、と、騒、然、と、し、て、耳、が、都、は、然、  
し、く、は、あ、る、や、あ、る、思、ひ、の、し、何、と、あ、く  
悲、し、く、成、る、ぞ、る、は、是、れ、我、の、志、

都 歸る急ぎ、やすむ、夜、き、く  
汽車の響、の、と、を、な、み、の、ち、く



麻田高野山町

野崎 駿東郡金岡村岡色

兵庫小物屋所控番地膳木沼津城内番於番地氏連

土俵谷所三丁目番 向島寺嶋村千石代葛月

麩町志吉番九長谷小倉芝田白金今畢所九美小倉名谷

今市初言町年地西竹午繼田丸山福山町四番地権一葉

日名揚中町早土番日敷麩町田上二番町田番地王頭情臣

三輪所小九番二味村小倉町田之墨所世番地本浦重剛

海布市共備町三丁目番地築地町上田番地 千川

牛込田白銀所七二番地藤文小石川田上宮坂町宇田上石山